311

始

特232
705

昭和元年十二月

濱京

山形縣出身者要覽

山形縣人協會編

昭和二年一月 帝國圖書館

自序

鄉縣山形縣を出でゝ京濱地方に夫れ〴〵種々の事業に從事さるゝ方々は無慮數萬、否、夫以上に上つて居る。

此等の人々は今何處に何をして居らるゝか、どんな經歷を經て今日に到つたか、又其近況はどうかと云ふことは山形縣人としてお互に知りたいことであり、又知らねばならぬゝとである。

此意味から。京濱山形縣出身者要覽の發刊が企てられたのであつて、從つて本書の目的は必しも縣人の成功錄ではない、傑出した縣人の人物評ではない、本書の中から成功錄や、偉人傳を求めらるゝ方は無論失望さるゝに相違ない、然し又一方から云へば夫れ々々自箇の職業に對し最も忠實に其日々々を送らるゝ方々は國家社會に取り、

最も有意義な人々であつて、殊に此等の人々が大震災の後を受け何れも復興の第一戰線に活躍し來つたことを考へ來れば、本書は悉く之れ本縣出身者各位の成功錄と稱するも敢て過言でない。

從つて本書記載の人物の順序は全く不同である。之は敢て編纂上止むを得ざる順序不同でなく、當初より豫定計畫の順序不同である。即ち武勳赫々たる陸海軍の大官も、大實業家も、傑出した政治家も、一會社員も、一商店主も、一勞働者も凡て之を同列に取扱ひ、凡て之を一山形縣出身者として記載したのであつて、此點は切に大方各位が記者の微旨を諒とせられんことを切望するの外はない。

唯遺憾なのは記者の寡聞なる、而して短時日の到底調査の行屆かざる、京濱地方在住縣人各位の全部を本書に記載することを得ず、從つて本書の題名、目的と甚だ相副はざるの怨みあることである。殊に横濱及び東京横濱間の沿道地方は殆んど調査の遑

なくして僅に其一少部分の方々を掲載したに過ぎないのは返す々々も記者の遺憾とする所であつて、是は近日縣人各位の御協賛、御助力を得て何等か完成の方法を講じたいと考へるのである。

從來此種の類書は無暗に形容詞を附して掲載さるゝ人物を讃美し、詠嘆し、凡て之れ一大英雄なるかの如く、一大成功者なるかの如く祭り上げ、然も其内容に到つては到つて空疎なのを例として居るのであるが、本書は全然かゝる空疎な編纂方法を廢し、忠實に各位の經歷、近況を記載するに止め、無益の形容詞や、途方もない御世辭は一切抜きにした。或は之を以て一寸呆氣なく感せらるゝ方もあるだろうが、之は山形縣人たる記者が山形縣人各位の經歷、近況を記載したのであるから、其點に免じて切に御寛恕を願いたい。

本書當初の目的は一人一頁、寫眞版入りの豫定であつたが、寫眞の持合せのない方

が多く、殊に十二年の震災に燒失して、其後撮影しないと云ふ人々が非常に多かつたので寫眞掲載は其一部分に止まるの止むを得ざるに到つた。經歷、近況は成るべく詳細に忠實に之を記載する豫定であつたが、御本人の方々の中では多く語らるゝ方あり、少なく語らるゝ方あり、人各其面の異なるが如く、其好惡は之を如何ともする能はず、其極めて單簡に語られたものは如何にするも之を一頁とすることが出來ず止むを得ず、半頁に掲載したものも少くない。從つて掲載記事の半頁、一頁は何も其御本人の價値に甲乙ある譯ではないのは云ふまでもないことである。各位諒焉。

大正十五年十二月

編纂員一同

村山置賜庄内三地方の地方色に就て

稻庵

國家も人に興つて人に亡ぶる。山形縣に關するもの、過去はそれを語る鄕土史家がある。現在の產業經濟を聽かんとせばそこら邊に幾多の大天狗小天狗が居る。叩けば泡ぐらいは吹くであろう。私は產業の主體としての人間を少し論じてみたいと思ふ。

往古鷹の白羽を献ぜしによつて出羽の國とは呼びなされた裏日本その南の半分羽前の全國と羽後の一部を包括する山形縣は大別して左の三區劃に分たる。

縣治の府山形市を中心とする村山地方その延長と見るべき最上郡、鶴岡市、酒田港を中心とする庄内地方、機業の米澤市を中心とす置賜地方それである。

これらは舊幕時代各異なつた大小藩主の下に統治されて來たため、文化的にも、經濟的にも、國として中央集權でなく歴史的分權に因て育まれた美しい充實せる小都會が散在するに到つて土民の氣風氣質も地方に依り各違つた特色を帶びてゐる。地方產業の大宗は農產であるが、就中米產地として庄內は今玆に喋々の要はないであろふ。陸の極みまで穰々の稻田を見渡すときその土民が如何に米作第一で努力し來つたかを雄辯に物語るものである。河村瑞軒に依て開かれた西廻船の發着點たる酒田港、そこに排水する最上の長江、その一帶は主として米穀の移出で榮えた。船人は酒田出るとき涙で出たがと唄ふたほど絃歌が涌いた。オバコ節が生れた。本間久四郎が生れた。鶴岡は酒井十四萬六千石の居城で、最近市制が布かれた感じのよい都會である。總じて庄內一帶は海山の食足つて人は重厚、温雅、遊子をして轉た温柔鄕の感を抱かしめる。

置賜地方は庄內とは正反對の氣質を代表してゐる。この地方は元來地味が肥沃でない。山勝ちで耕地に乏しい。從つて蠶桑と機業を經濟中心とした藩公上杉が士族授產のために奬勵されたのも遠因の一つであろう。製絲業が盛んで羽前エスキトラの名がある。南信州を連想せしむる部落が散在する。

米澤市や長井町の機業は所謂中產階級を得意とする米琉の產地であるが多くは家內工業の範疇を出でないのは什麼うしたものか。由來米澤は武家の都であるだけ何事も實行よりは理窟が先に立つて自我の强いのは天下一品と稱せられる。經濟的に人の和を得ない所以であらう。知らず昨今の不景氣はその名を風ともいふて押しの利かぬ代物なるぞ恨みなる。村山地方は村山米といふ軟質米の產地、縣內で人口も最も稠密であり文化も高い。小規摸ながら各種の產業工業が發達してゐる。山形市はその昔南朝の殘黨を抑へるべく北朝の鎭守を置かれた府、地の利を占めた所である。

德川の初期最上家百萬石の榮華幻と消え消せて爾來小太名の捨てどころとなつた。

嘗ては奥州の近江商人と云はれたが産業の革命と交通の變遷が前垂掛けの小商人の氣質ばかりが殘つた。經濟的にも頭は進んで居て何よりも實利が先に立つて大局を見る明が乏しい。

東北人は牛に譬へられる。軀幹が長大であり頭は鈍重で容易に熱しない、さうして勤勉であるが人に與ふる第一の印象は餘り香ばしくない、これが社會に立つ上に己にスタートで一歩を誤る所以であろふ。輕卒に人に許さないが諒解して來ると血もすゝり合ふ。大概な人々と交誼を持續してゆける。溫順性に富むので伯樂を得たものは千里の駿馬となつて中央に顯はる。然も朔風に嘶くものは幾許あるであろうか。

山形縣は東北の中でも地味が勝つた方であり善く働くのである。享樂を罪惡視する傾向があり、思想からいふても、生活樣式から云つても、質實といへば質實、剛健といへば剛健であるが文化生活とは大分距離があるやうである。

都市集中の弊を防壓する手段としては多種多樣の産業の創造、健在なる經濟的設備は素より肝要であるが同時に健全なる享樂的設備の普及と發達に依つてその生を樂しましめ、生活を充實せしめ、その土に親しむやうにせねばならぬ。製造工業に就いてもその製品が日本的であるばかりでなく世界的に少くとも東洋南洋向でありたい。小區域のみを販路とする商品の製造、日本のみを消費地とする産業の將來はこの先幾許を期待し得やう。大量生産からも危險分擔の主旨からも鞏固な販路との連絡さへ得れば輸出は安全であり、貿易は榮える。

さはれ山形縣の人々よ。文化住宅とやらに及腰して居る人間には着實な底力が涌き出づるものでない。疊の上にどつかとすはれ、さうして卿等の運動を開拓するに一心不亂であれ、東北人は永久に帝國の基礎を形成するものであらねばならないと思ふ。

原籍地　東京府荏原郡目黒町上目黒四〇七

舊山形藩主
子爵　水野忠欵（マツ）

現住所　原籍地　電話青山一九二九番

子の家は清和天皇の皇孫、鎮守府將軍源經基の支裔にして、右衞門太夫小野忠政の子忠守の後である。

忠守の子監物忠元德川秀忠に仕へ、累進して書院番頭に昇り、下總結城郡山川の城主となり、子孫十數代、駿州田中、三州吉田、同岡崎、肥前唐津、遠州濱松を經て羽前山形五萬石の藩主として忠弘に到り、維新の際江州淺井郡五萬石管轄の命を受け朝日山藩と稱す。明治二年六月山形藩知事となり、同十七年七月子爵を授けらる。弟忠美其後を嗣ぎ、忠美歿後現忠欵氏（忠美氏長男）之を嗣ぐ。

氏は明治四十年八月生、學習院高等科一年より本年武藏高等學校に入學せり。一弟あり、忠恂（ダノブ）氏と云ひ、母堂は岩倉具實公第三女である。

原籍地　米澤市

宮內省御用掛
伯爵　**上杉憲章**

現住所　東京府荏原郡大井町山中四一九一
電話高輪二〇番

伯爵上杉家は舊米澤藩主、內大臣鎌足の裔良門の後である。

十一世重宗に到り始めて上杉と稱す。後十一世寛政に到り北條氏康の爲めに亡され越後に奔り長尾彈正少弼景虎に投ず。景虎依つて上杉氏を冒す。其嗣子景勝會津百萬石を領す。

關ヶ原の戰役景勝石田方に投じ米澤三十萬石に移さる。

歿後十一世を經て先代茂憲公に到り、明治八年伯爵授與、元老院議官、貴族院議員に選出さる。

氏は其の三男吉井信康子爵松平忠夫氏の從兄である。

明治九年十一月生、大正八年家督を相續す。

男隆憲(大正六年生)女敬子(明治四十二年生)四男照雄(大正七年生)あり。

原籍地　米澤市

子爵　**上杉勝憲**

現住所　東京市四谷區傳馬町一ノ五四

從四位子爵上杉勝憲氏は米澤藩の支流、內大臣藤原鎌足の裔、從四位大侍從彈正大弼上杉宗憲の四男、駿河守勝周の後である。勝周兄民部大輔吉憲より新田の地を分與せられ、別に一家をなした。

後四世を經て正四位子爵勝賢に至り、氏入りて其後を亨く。氏實は先代勝賢の養子で、米澤藩の直流上杉家の當主憲章氏は氏の從兄に當つて居る。

氏勝賢の養嗣子となり、幼名恒憲を改め明治三十一年に襲爵した。

氏幼より華冑界に人となり、溫厚にして人格高く、よく家系の隆盛と、一族の親密とを計り、內外に令名あり。

原籍地　最上郡新庄町
貴族院議員
子爵　戸澤正巳（マサオト）
現住所　東京市小石川區丸山町三五　電話小石川四五八番

從四位子爵戸澤家は舊新庄藩主にして、其祖忠盛の弟忠正より出づ。數世の後政盛東照公に從つて功あり。羽前新庄に封ぜられた。

後十一世を經て正實に到る。正實は天保十四年を以て正令の封六萬八千二百石を襲ぎ、維新の際大義を唱道し、自ら藩兵を率ゐて各所に轉戰し王事に勤勞した。功に依り賞與一萬五千石を下賜され、明治十七年子爵を授けらる。

氏は其の長孫にして明治二十一年九月を以て生れ、同二十九年襲爵、大正八年貴族院議員となり、後從四位に叙せられた。

家族は夫人（明治二十四年生、酒井忠一子妹）との間に男正修（大正三年生）長女田鶴子（大正二年生）二女靖子（大正五年生）三女尅子（大正七年生）四女英子（大正八年生）五女薫子（大正十年生）の一男五女あり。

原籍地　東村山郡天童町
從四位子爵
鐵道大臣秘書官　織田信恒
現住所　東京市牛込區藥王寺町五一　電話牛込四三五六番

舊天童藩主織田家は桓武天皇の皇子、式部卿葛原親王の孫上總介平高望九世の孫、內大臣重盛の後である。重盛十八世の後胤左大臣信長の二男前內大臣信雄、初め伊勢の國主左中將北畠信雄の後を受け北畠氏と號す。天正十年父信長逆臣光秀に弑せらるゝに及び、始めて姓を織田と改め、爾來代々繼承、十三世にして先代信敏あり、信敏維新交新の際天童藩主二萬石たり、戊辰役に東北諸藩聯盟して官軍に當るに當り、夙に勤王の志あり大藩の間に介在し、官軍の爲め奮戰したるも衆寡敵せず遂に敗らる。

氏實は故相馬誠胤の長子たりしが乞はれて信敏の養嗣子となり、明治三十八年家督を相續す。明治二十二年生、夙に學習院を卒へ、大正四年京都帝國大學政治科卒業、直に日本銀行に入り、後同行を辭し、商工業視察の目的を以て支那歐米に遊び、歸朝後東京朝日新聞社に入り、本年井上子鐵相となるや拔擢されて其秘書官となる。

夫人榮子との間に三男あり。

原籍地　米澤市元中馬口勞町
從三位勳二等
賞勳局總裁　**宇佐美勝夫**
現住所　東京府荏原郡大崎町上大崎四四四
電話高輪七九一番

氏は明治二年五月十二日生、士族宇佐美勝佐氏次男、同五年に分家した。
山縣縣立米澤中學校卒業、高等學校を經て明治二十九年七月十日東京帝國大學法科大學を卒業。
卒業後內務屬を振り出しに、德島縣參事官、京都府參事官を經て、明治三十五年宗敎局第一課長兼第二課長となる。
明治四十一年內務省參事官となり、更に大臣官房總長、統計局主任となる。
同三十七八年戰役の功に依り勳五等瑞寶章を授與さる。
同四十一年富山縣知事となり、後朝鮮總督府內務部長に榮轉、同總督府濟生院長を兼ね、大正元年韓國併合に際し、記念章、大禮章を授與さる。
同六年朝鮮總督府土木局長に任ぜられ、更に八年仁川築港に功あり、賞杯を下賜さる。大正十年東京府知事任命、同十四年賞勳局總裁となる。五男あり。

原籍地　最上郡新庄町
東京府知事　**平塚廣義**
現住所　東京市芝公園知事官舍內
電話青山二三一〇　五三六九番

氏は明治八年九月二日生、士族平塚榮次郎氏長男。
幼にして學業拔群、東京帝國大學に入り、明治三十五年法科政治科を卒へ、直に高等文官試驗を受けて合格し、同三十八年福井縣參事官として赴任し、數多の委員に擧げられ、後同縣事務官に任ぜられ、宮城、長崎、三重、新潟、神奈川等各縣事務官に順次歷任した。
其後愛媛縣事務官、參事官を經て新潟縣內務部長たり、同縣農工銀行監査役たり、轉じて兵庫縣內務部長、同縣農工銀行監査役となる。
大正五年栃木縣知事に任ぜられ、同十一年長崎縣知事に轉じ、同年更に兵庫縣知事となる。
其後宇佐美氏の後を受けて、東京府知事となり、以て今日に及ぶ。
夫人シゲ子(明治十八年二月生)貞淑の譽れ高く內助の功多し。

原籍地　鶴岡市

警視總監　**太田政弘**

現住所　東京市麹町區有樂町一ノ二官舍　電話大手七〇八〇　七〇八一番

氏は明治三年十月四日生、太田政道氏長男である。
明治三十一年東京帝國大學法科大學英語科を卒業し、翌三十二年高等文官試驗合格
宮崎、島根、愛媛各縣警察部長歷任。
愛媛、長野各縣事務官を經て警視廳官房主事、同第一部長、消防本部長を經て內務
警保局長に任命さる。
其後福島、石川、熊本、新潟各縣知事として令名あり。
大正十三年加藤內閣成るや、拔擢せられて警視總監となり以て今日に及ぶ。
夫人タミヱ子(明治二十二年生)との間に長男政明(明治四十年生)三女美枝子(明治
四十二年生)四男政知(大正二年生)五男政信等あり。長女千枝子、次女道子は他家に
嫁す。

原籍地　米澤市

三井銀行常務　**池田成彬**

現住所　東京市麻布區永坂町一　電話青山六三八八番

氏は慶應三年七月生。
舊米澤藩家老成章氏長男。
初め慶應義塾に學び、後米國に渡りてハーバート大學に入り、明治二十八年學卒へ
て歸朝するや直に三井銀行に入る。
氏の才幹は忽ち故中上川氏の知る所となり、幾くもならざるに擢んでられて足利支
店長となり、同三十四年歐米商工業を視察して歸朝するや、本店に移りて營業部次長
同部長を經て、同四十二年同銀行常務となり以て今日に及ぶ。
氏が東都、否我國銀行界の重鎭たるは何人も知る所で前記三井銀行常務の外、三井
合名會社參與、東京手形交換所委員、東京銀行集會所聯合會長等の重職にあり。
夫人艶子（明治十五年生）との間に長男成功（明治三十五年生）次男潔（明治三十
六年生）三男豐（明治四十一年生）あり。

原籍地　鶴岡市
日本勸業銀行總裁　**梶原仲治**
現住所　東京府荏原郡大崎町下大崎八九
電話高輪一二九八番

氏は明治四年四月四日生。
梶原安吉氏弟にして、明治二十八年分家一家を創立す。
同三十年東京帝國大學法科大學卒業。
卒業後直に日本銀行に入り、累進して大阪支店長、倫敦代理店監査役、本店調査局長、横濱正金銀行副頭取となる。
曩に歐米に留學、更に清韓を視察す。
其後日本勸業銀行總裁となり以て今日に及ぶ。
夫人ムメ子（明治七年生）との間に男正治（大正四年生）女玉枝子（明治四十年生）あり。因に長女春枝子（明治三十七年聖心女學院卒業）は法學博士岸清一氏長男法學士偉一氏に嫁せり。

原籍地　東置賜郡赤湯町
安田保善社常務
安田銀行副頭取　**結城豐太郎**
現住所　麻布區永坂町六一　電話青山六四一二番

氏は明治十年五月生、與右衛門氏の三男である。
山形縣立山形中學校卒業後、仙臺第二高等學校を經て、東京帝國大學に入り、明治三十六年東京帝國大學法科、政治科を卒業した。
帝大卒業と同時に日本銀行に入り、累進して秘書役となる。
大正五年名古屋支店長となり、同七年大阪支店長に轉じ、波瀾多かつた同地方の財界に對し擧措宜しきを得、一般に其手腕を認めらる。
大正八年同銀行理事となり、同十年辭して安田保善社に入り常務理事に擧げられ、安田銀行副頭取を兼ぬ。大正六年勳六等に叙せらる。
夫人もと子との間にアイ子、久子、千代子、京子、二三子、和子の六女あり。
趣味は刀劍、登山。

原籍地　南置賜郡南原村芳泉町二六〇〇

武俠世界主筆
オフセット印刷株式會社常務

針重敬喜

現住所　東京府北豐島郡瀧野川町田端四一
電話小石川七六五八番

氏は明治十八年二月一日生、幸平氏の長男である。明治四十年早稲田大學英文科を出で、直に操觚界に入り、始め讀賣新聞社の運動方面擔任記者となつたが、氏が學生時代庭球部選手としての經驗を基礎として執筆した運動記事は、當時好評頗る嘖々たるものであつた。

其後東京日日新聞社に入り、更に報知新聞に轉じたが、大正元年春浪押川氏の雜誌武俠世界を興すに及びて招かれて同誌に入り、然も同三年春浪氏病を以て逝くや、氏は其後繼者として同誌を經營すること十有餘年以て今日に到る。

氏は前記武俠世界主筆たるの外、日本運動協會評議員、オフセット印刷株式會社常務取締役、スタンダード運動用具株式會社監査役、日本運動協會評議員、早稲田大學庭球部監督等の重職にあり。二女あり。

原籍地　東田川郡東榮村添川

實業家
發明家

現住所　東京市本郷區眞砂町二七

伊藤啓助

氏は明治元年十月十九日生、吉藏氏の長男、吉藏氏は夙に天才的能書家を以て知られ、庄内藩の事業たる最上川沿岸工事の監督を擔當し大に事績を擧ぐ。然も殆んど家事を顧みるの遑がなかつたので、氏の少年時代は頗る苦學力行したが、然も優等を以て明治二十九年明治大學法律學部を卒へ、北海炭礦に入り、更に實業界方面に活躍した。

氏は多年考書研究の結果、遂に有效無比なる約束手形用紙を考案し、同三十三年著作權を登錄したが、所謂萬效手形用紙と名くるものであつて今日では日本全國は勿論殖民地に迄普及し從つて氏も亦多大の資産を蓄積することを得た。又最近七年間苦心研究の結果發明したのは自動折疊式洋傘で、僅か一尺内外に折疊み、五秒以内に伸縮自在にするのが其特長であつて、斯道大家審査の結果世界一との賞賛を博して居る(大正十四年三月二日特許第六二一六七八號、尙一層改良を加へ特許出願公告第九五四五號)二男一女あり。趣味としては相撲、角界に貢献する所多く、木戸御免の特待を受く。

原籍地　鶴岡市若葉町

茶道教授　**石川栞齊**

現住所　東京市麻布區廣尾町三五
電話高輪五〇一二番

氏は嘉永六年正月十一日生。

舊庄內藩酒井侯の世臣にして旗奉行であつた小兵衛の長男である。嘉永六年生れだから本年七十四歳の高齡。

明治維新後間もなく東京に出で、數年官途にあつたが、壯年の頃より茶道に趣味を有し、致仕の後、京都裏千家の宗家たる今日庵千宗室宗匠に師事し、數十年斯道を研究して茶名を嘯月庵宗靜と稱した。其後累進して今日庵的傳教授となり、現住所で數多の門人を指導して居る。

氏の長男清、二男磐彥の兩氏は永く洋行後、清氏は服部時計店重役、磐彥氏は大阪に於て獨立して商業に從事し、何れも實業界に相當の地位を占めて居る。

原籍地　北村山郡西郷村名取

得生院住職　**入西玄榮**

現住所　東京市淺草區田島町九
電話淺草五二七一番

氏は明治二十年十月十日生、入西玄堂師の長男なり。玄堂師は既に八十五歳の高齡なるも今尙秋田縣本庄町蓮華寺の住職として健在せらる。氏は鄕里楯岡尋常高等小學校より秋田縣立本庄中學校に入り、明治四十年同校卒業、直に上京して宗教大學選科を履修し、四十二年秋田步兵第十七聯隊に入營し、翌年歸休除隊となり、大正元年淨土宗得生院住職に補せられて今日に到る。

氏は得生院住職たるの外、宗內的には東京教區々會議員、淺草佛教各宗同盟會主事趣味講演研究會主事、宗外的には田島町々會幹事、第三十八地區整理地主代表補缺委員の要職にあり、殊に氏の現住寺外十三ヶ寺の移轉墓地改葬問題に就ては佛教關係は勿論官廳の交涉其他經濟問題の解決等に就てあらゆる氏の蘊蓄を傾けて其目的の貫徹に勗めて居る。

氏は寺院の歷史的記錄に詳しく、講演に趣味を有す。活動的な教界の新人。

原籍地　山形市旅籠町五一九

銀行員　渡邊源二郎

現住所　東京市牛込區早稻田町三四
電話牛込一四六九番

氏は明治十九年十二月十七日生で、故吉兵衛氏の次男である。
縣立山形中學校卒業後、早稻田大學に入り、明治四十二年同大學商科を卒業した。
同大學卒業後株式會社南洋商會の經營に關與し、大正八、九年の間南支、南洋方面を歷遊視察して大に稗益する所があつた。
大正十二年以來株式會社雨羽銀行に入り、東京支店副長として今日に到り、堅實有爲の青年銀行家として世間の信用も頗る篤い。
大正六年分家して一家を創立した。
氏に一男三女あり。
其趣味は頗る多方面に亘る。

原籍地　山形市香澄町木實小路二八五

セメント工業株式會社
取締役主事　玉井貞雄

現住所　東京市下谷區谷中初音町四ノ一四一

氏は明治九年一月二十九日生。
山形縣立山形中學校出身。
中學卒業後陸軍方面に入り、陸軍砲兵中佐まで進んだが、病氣の爲め豫備役に編入せられ、靜養して間もなく健康を恢復した。
其後大正八年セメント工業株式會社に入り、取締役兼主事の重職を占め、同社業務の發展に努力し多大の成績を擧げて居る。
氏は軍籍時代の功勳に依り從五位勳四等の位勳を持つて居る。
實業家としての氏の發展は大に今後に見るべきものあらん。

原籍地　鶴岡市日和町甲一〇

酒味噌醬油計量器販賣業　**本庄市藏**

現住所　東京市本郷區湯島天神町三ノ一五

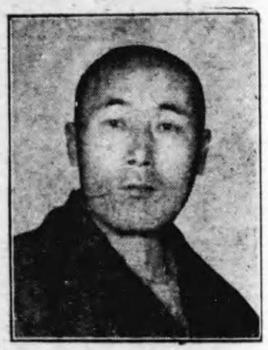
氏は明治十九年四月九日生。

本庄政一氏養嗣子。

嘗て農商務省商工局に奉職したこともあつたが、中途で官僚生活を打切り、商業の方面に新生面を開拓することゝなつた。

大正五年上京以來、體温計、寒暖計の製作、販賣に從事し、尠からぬ好結果を收めたのであつたが、震災の爲め大打擊を受け、然も容易ならぬ苦心を以て、之が復興に瞿め、本年からは更に酒味噌醬油販賣業を兼營して居る。

氏は努力奮鬪の人であるから、今後の發展大に見るべきものあるは疑ない。



原籍地　飽海郡本楯村庭内二八

庄内屋主
鑄金家　**阿部廣太**（號一聲）

現住所　東京市本郷區根津片町二三
電話下谷六二二三番

氏は明治十三年一月十八日生で斧吉氏の長子。

十七歳にして志を立て、上京、故岡崎雪聲氏の門に入り四十二歳迄前後二十五年間同氏の敎を受けた。大正九年恩師逝去後現在の場所で鑄金業に從つたが、其眞價は廣く世間に認められ、宮內省の明治天皇御銅像、房州小湊誕生寺の日蓮上人、東京府廳の太田道灌、德川家康、須田町の廣瀨中佐、興津井上侯の銅像等を鑄造し、三越吳服店は最も同氏を信賴して貴金屬及美術品一切の鑄造を囑托して居る。

震災後大に感ずる所あり、庄內米の販賣店を開き殆んど原價同樣の販賣法にて市民の生活改善に資する所頗る多く、就つて其營業も非常に發展したが、氏は同店基礎の確立と同時に再び鑄金界に返り、斯業の發達に寄與せんとして居るから其前途の活躍大に見るべきものあろう。

氏に一男一女あり。尙氏は日露戰役で步兵上等兵功七級勳七等の位階勳章を有す。

原籍地　米澤市無足町
桑島工業社主　**桑　島　勇**
現住所　東京府北豐島郡西巣鴨町宮仲二五四三

氏は明治十三年十月生、明治三十二年米澤中學卒業、同三十六年中央大學卒業、直に合資會社櫻組（後の日本皮革株式會社）に入りしが、幾くもならずして書肆隆文館に入りて雜誌新聲の編輯に從事す。越えて明治三十九年頃野依秀一氏と共に雜誌實業之世界を創刊し氏は其主筆として椽大の筆を揮ひたりしも居ること一年餘故ありて故山に歸臥し、悠々自適すること年あり、大正三四年頃再び上京し、同五年伊藤式保温材製造所を創立し、同六年更に株式會社に變更し、自ら其專務として經營の衝に當り、傍ら東京防災工業株式會社專務、株式會社東京製作所取締役等を兼任す。大正十三年保温材會社專務を辭し、桑島工業社を創立、特許青寫眞燒付器械の製造販賣に從事し今日に到る。

氏は法科を履修せるも、文學方面に於ても其造詣頗る深く、觀劇と讀書を以て其唯一の趣味とするのみならず、田中智學師門下の熱心なる日蓮信徒なり。一男一女あり

原籍地　西置賜郡東根村淺立三九〇九
武藏野高等女學校長　**高　橋　與　惣**
現住所　東京府北豐島郡瀧野川町西ヶ原
武藏野高等女學校　電話小石川六三四六番
王子四〇〇番

氏は亡千代松氏長男で明治十年九月十五日の出生である。
明治三十二年山形縣立師範學校卒業後、歷史を專攻し文部省檢定試驗に合格せられた。上京して東京市小梅小學校長を四ヶ年勤務。
氏の令夫人トク子は山形縣立女學校出身で、卒業後家事科を專攻し文部省檢定試驗に合格された。大正九年夫君と共に大橋家政女學校と幼稚園とを開校經營せられ、後大正十二年四月武藏野高等女學校と改稱し現在の地に移轉し、與惣氏は其校長となつた。生徒八百名を收容し、職員二十名、漸次盛大に赴き校舍狹隘を告ぐるを以て、十六年度より增築に着手し十八年度工事全部完成の豫定で着々計畫を進めて居る。
氏に四男五女あり。長男二十二歲東京外國語學校在學、次男武藏野高等學校在學。
氏は日夜敎育に沒頭し、敎育以外何等の趣味らしき趣味を有せざる程の熱心家である。

原籍地　南村山郡上ノ山町裏町四九

辯護士　**菅沼廣助**

現住所　東京市小石川區丸山町六
（龜井伯邸跡）
電長小石川六一三六番

明治十八年六月十二日生。上ノ山町の一農家に生れ、幼にして神童の稱あり。十六歳郷關を出で、仙臺東北學院に學び、第二高等學校を經て東京帝國大學に入り大正三年同大學英吉利法律科を卒業したが、其間或は牛乳配達となり或は新聞配達となり、全くの苦學力行で勉學した。卒業後大學から選拔され、大阪住友家に入つたが、後北米に遊學し大正六年春歸朝、故法學博士大場茂馬氏の門に入り辯護士を開業し、後幾くもなくして獨立し、現今では辯護士界の一異彩を以て目され、日本辯護士協會理事たり。

政治方面では小石川區々會議員を振出しに、先年鳩山氏を向ふに廻して市會選擧に落選せるに奮激し、十三年郷里に於て衆議院議員の選擧競爭に出馬したるも僅少の差にて落選せるは惜むべし。目下本業の傍ら上杉博士と共に政界革新運動に奔走さる。雄辯家としての氏は世既に定評あり、刑事辯護を得意とす。夫人百合子、子なし、愛犬チエリー。

原籍地　鶴岡市新士町甲一三

新聞記者　**小澤理吉**

現住所　東京市四谷區愛住町二三
電話四谷四六六〇番

氏は明治十六年一月二十三日生、理三郎氏の長男である。東北法律學校卒業後、早稲田大學の文學科にて教育學を修め、歸縣し日刊鶴岡新聞主幹たること五年、此間獨力私立鶴岡圖書館を創立し、之を經營すること三年、國を去るに當りて鶴岡町に寄附した。之が現在市立圖書館大寶館の基礎となつたのである。

氏は二十七歳にして町會議員に最高點を以て當選した。赤川普通水利組合會議員として地方の爲めに盡した。特に町會議員として市制施行の根基を建造其功勞に依り大正十四年六月二十五日新鶴岡市會より感謝狀を送らる。

大正三年上京、數多會社の重役たりしことありしが、感ずる所あり、大正十一年より市區自治上の向上發展を期する爲め東京民聲を發刊し、社長兼主筆となり、他に東京毎日新聞四谷支局長を擔任す。

氏三男一女あり、趣味は政治、書畫骨董、新刊書の繙讀。

原籍地　西田川郡榮村小京田六六

表具師　**岡田金治郎**

現住所　東京市本郷區駒込千駄木町一〇九

氏は明治二十二年一月七日生。

小南峯藏氏次弟。

小學校時代、不幸にして左足の自由を失ひし爲め、二十歳頃から鄕里の佐藤五三郎氏に就て二十八歳まで八年間表具師の年期修業をして立派に勤め上げた。

翌二十九歳上京。

東京は京橋區阿部表裝師(宮內省御用)の處で尙一層斯業を修得する所あり、大正十二年三月に到つて現在の場所に獨立開業することゝなつた。

氏は青年時代から努力奮鬪を續けられたので、其營業の逐日繁昌しつゝあるも無理はない。

原籍地　最上郡新庄町十日町三五一

訓導　**土田銀松**

現住所　東京市麻布區富士見町三六染山方

氏は明治三十一年八月九日生、銀次郎氏長男、大正五年三月山形縣立新庄中學校を卒業、同八年三月京城師範學校二部卒業、三年間朝鮮平安北道新義州公立尋校小學校に勤務したが、大正十一年四月上京し、深川區明川高等小學校に赴任、十二年の大震災から現麻布區本村尋常小學校訓導に轉任し今日に到る。

氏が大震災當時危險を冒し小學校奉置の御眞影を風呂敷に包み、重要書類と共に之を脊負ひ遙か葛飾郡部まで避難したことなどは教育家として傳ふべき一美談である。

氏は趣味としてよりも寧ろ其生命として洋畫を研究して居る。其師は小林萬吾先生である。然も亦教育生活の一面にも無限の妙味を感じ、暇あれば讀書から、作詩に耽るなど平凡な教育家とは多少其選を異にして居る。

原籍地　米澤市

正三位勳一等海軍大將　**山下源太郎**

現住所　東京市麴町區平河町五ノ一七　電話四谷二二〇七番

米澤藩士山下新左衞門氏の二男、文久三年七月三十日生、後分家して一家を創立す海軍兵學校に入り、明治十二年卒業して、同十九年海軍大尉となる。爾後累進して大正元年海軍中將に任ぜられ、同七年大將に任ぜらる。

其間金剛、秋津洲各砲術長、和泉、笠置各艦副長、大本營參謀、第一艦隊參謀長、佐世保鎭守府參謀長、艦政本部第一部長、軍令部參謀、海軍兵學校長等に歷補、更に海軍々令部次長、佐世保鎭守府司令長官、第一艦隊司令長官、海軍々令部長兼海軍將官會議々員に任ぜられ、現今は軍事參議官たり。

日露戰役の功に依り功三級、金鵄勳章を賜はる。

夫人德子(明治十二年生、故貴族院議員宮島誠一郎三女)との間に男一郎、女淑子、安藝子あり。長女千鶴子は双葉女學校出身海軍大尉水野知彥氏に嫁す。

原籍地　北村山郡小田島村

日本畫家　**石山太柏**

現住所　東京府豐多摩郡杉並町天沼一七三

本縣東村山郡豐田村に柏倉雪章と云ふ隱れた一畫家があつた。氏は玉章門下で同地での豪家であつたから別に職業的に其作品を公にする必要がなかつたので餘り世に現はれて居らぬが、其技倆は慥に見るべきものがあつた。惜い哉、昨年病を得て物故したが太柏氏は實に此の雪章氏に就て畫を學んだのであつて、子のない雪章氏は恰も我子の如く太柏氏を指導し激勵して以て今日あるを致さしめた。

太柏氏は明治四十四年上京、暫らく寺崎廣業門下に學んだが、爾後は獨自一已の工夫を以て、郊外閑寂の地に居をトして日夜畫筆に親しんで居る。其進境の年と共に人目を驚かすものあるも蓋し故ありである。文展、帝展、院展等數回入選、箇展六回開會。

氏の茶道は趣味と云ふよりも既に其堂奧に達して居る。其他謠曲、生花、造園等頗る其趣味は汎い。明治二十六年四月生。

原籍地　山形市横町

料理店
露月亭主人　**猿谷長治**

現住所　東京市芝區露月町一五
電話銀座六六三四番

食通で芝露月町の露月亭を知らぬものはない。云ふまでもなく同亭主人は山形縣人の一人なのである。

明治十九年八月三日生。

山形で有名な市南の料理店中山嘯月亭主人と氏は兄弟である。十六歳の年に上京して種々料理業を研究したが遂に獨立して現在の所に料理店露月亭を開業し、以て今日に到つた。

洋食は固より日本料理、多人數の宴會も引受けて居るが、勉强で如才ない營業振りは日を追ふて益々繁昌に赴きつゝある。

氏は東京市洋食組合の役員。

原籍地　北村山郡戸澤村稻下一三八

新聞專賣業
時力堂主　**井澤清太郎**

現住所　東京市京橋區木挽町四ノ六

氏は明治四年九月二十二日生。

鄉里戸澤村の小學校を出で、二十餘歳にして戸澤村役場に入り、十六年間同村收入役を勤務し、村治上多大の成績を擧げ、明治三十七年退職した。

退職の年直に高橋善五郎氏を社長とする山形自由新聞社に入り、其後横尾彌門氏代つて同社々長となり、明治四十四年山形市大火迄氏は同社營業部に勤務した。

大火と同時に一時歸鄉したが、大正二年上京、同四年時事新報專賣を引受け、新に京橋專賣所時力堂を創設し、其主任として奮鬪努力の甲斐あり今日の盛況を見るに到る。

氏に一男三女あり。男は大正十三年慶應義塾大學法科を卒業し、目下時事新報出版部に勤務し今日に到る。

氏の趣味は謠曲。

原籍地　東村山郡大寺村北垣一〇五

現住所　東京市淺草區田中町九二

鼻緒商　武田庄藏

氏は明治二十六年六月九日生。

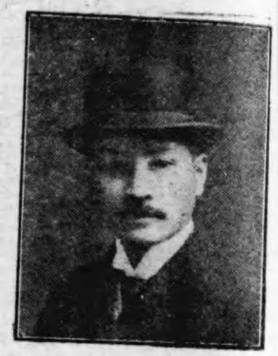
長藏氏の長男で、小學校卒業後、山形市に出て十八歳迄居つた。

十八歳の年に上京、各所にて修業したが、二十歳になつて鼻緒業を修得し、二十八歳から現在の場所に開業今日に到る。

氏の自宅には目下十五人以上の職工を使傭し、其外受負に渡して居る處も頗る多く其取扱數毎月十萬足を下らないと云ふ程の盛況を示して居る。

從つて問屋方面の信用も厚く、氏の實直勤勉は益々各方面の信用を高めて居る。

一女あり。



原籍地　福岡市十三軒町二

會社員　重田鐵矢

現住所　東京府北豐島郡西巣鴨町堀之内一二一

氏は明治三年鶴岡市に生る。重田氏の祖は今川義元の叔父にして、本姓は今川氏なり。明治二十三年徴兵として入營、二十六年除隊、直ちに庄内中學校に奉職、居ること十三年、此間日清、日露の戰役に出征し、歩兵曹長に進み、勳七等に叙せらる。三十一年西田川郡書記拜命、兵事、社事、衞生を擔任す。

大正六年全家東京に移住し、直ちに東京火災保險會社に奉職現今に到る。東京は元祖先の地なるが故に永久、此地に居住の目的を以て、大正十二年八月巣鴨の地に新居をトす。因に氏は温厚篤實の紳士にして夙に鄕土史の研究に志し「庄内資料」の著あり

氏は三男二女あり。長男三十七歳、教育に從事し、次男は他家を繼ぎ、三男は島根縣立病院に勤務し、二女子は他に嫁し、實に十二孫の祖父なるも、元氣尙壯者を凌ぐ

原籍地　東村山郡鈴川村大字上山家三二五

東京保温材株式會社
常務取締役　武田尾吉

現住所　東京府北豐島郡西巣鴨町堀ノ内六九

氏は明治十八年八月二日出生、山形縣立山形中學校を卒へ、直に早稲田大學に入り明治四十年同大學政治經濟科卒業、尚一生間研究生として國際公法を專攻せり。

爾後外務省條約改正課囑托として約半ヶ年勤務、辭して日本電報通信社に入り、約二ヶ年にして辭し、更に報知新聞社調査部に在勤すること約七年の長きに及ぶ。

其れより彼の有名なる横濱小野商店（蠶糸貿易商）に入り同社に勤務すること七年大正十五年大株主たる同商店主の推薦に依り、東京保温材株式會社取締役に就任し、同十五年二月より專務取締役として同社經營を双肩に擔ふに到れり。尚氏は同社の外大正製菓株式會社監査役、日本ベニヤ株式會社取締役を兼任す。

氏に一男二女あり。唯一の趣味は謠曲。

原籍地　米澤市

從四位勳六等
會計檢査院部長　今泉國太郎

現住所　東京府豐多摩郡大久保町東大久保一五六

明治二年七月二十三日生。

氏の半生は頗る奮鬪的の生活にして叙し來れば一篇の立志傳である。明治十三年郷里戸長役場の小使を振り出しに、市役所給仕、同雇、明治二十五年漸く市の書記となり、其後間もなく上京した。

明治三十一年會計檢査院書記に任ぜられ、同三十五年高等文官試驗を登第、同三十七年鹽務局事務官となり、同三十九年朝鮮總督府事務官に轉じ、同四十一年會計檢査院檢査官に任ぜられ、其後次第に昇進して大正十三年には會計檢査院第三部長の重職に就くに到り以て今日に到る。

夫人和子（四六）、男二人、女二人あり。

趣味は圍碁、謠曲、書畫等。

原籍地　西村山郡本郷村本郷

東京府立第三中學校教諭　**林　石　五　郎**

現住所　東京市小石川區大塚坂下町七一

氏は明治十九年十一月十五日生。明治三十六年山形縣立中學校第四年から東京物理學校に入學し、同三十九年に全科を卒業した。氏が數學に就て少年時代より其非凡な秀才であつたことは此の一事でも充分看取される。

物理學校卒業後、埼玉、成田兩中學の教諭に歴任し、數學、物理學の教授を擔任したが、明治四十五年上京東京府立第三中學校教諭として引續き今日に及び其訓育せる子弟從つて頗る多い。

氏は中等教育の數學教授が餘りに非實際的非實用的で難解なるを遺憾とし大正十年より中等教育用數學教科書の編纂に着手した。新制算術、新制代數學は既に其發刊を見、近く新制幾何學の編纂に取掛つて居る。

氏に男子二人、女子一人あり。

原籍地　鶴岡市泉町丙三

音樂家　**石　川　友　松**

現住所　東京市本郷區菊坂町八〇

氏は明治二十二年一月十七日生。

東京音樂學校出身。

其後音樂教師として斯界に活躍し以て今日に到る。

氏の嚴父龜太郎氏は拜山と號し、日本畫家及作詩家として有名である。

原籍地　西村山郡高松村五八八

産業組合
中央金庫理事　**加藤正美**

現住所　東京府豐多摩郡澁谷町中澁谷四二五　電話青山六六六一番

氏は明治十二年五月三日生、其經歷大體左の如し。
明治三十九年東京帝國大學法科大學卒業。
同年卒業後直に農商務省に入り山林事務官となる。
明治四十二年以降統監府鐵道勤務。
大正七年秋田大林區署長となる。
同　九年農商務省書記官任命。
同　十年八幡製鐵所理事任命。
同十二年末産業組合中央金庫設立と同時に現職に就き今日に到る。

原籍地　米澤市南町五八七

壽司料理業　**井上忠治郎**

現住所　東京市麹町區有樂町三ノ一

氏は明治二十三年五月生れ、同三十九年十何歳の弱年で上京してから今日までの間日本の内地の大部分と、支那の一部を漂浪し、或時は官吏、或時は土工と云ふやうな頗る數寄な運命に弄ばれ、遂に今日の氏を玉成したのであるが、父には八歳にして別れ、母には十一歳にして死別した。

現在では壽司料理屋富可川の主人として活躍して居るが、其奇拔な營業振りで日夜押すな〳〵の繁昌を極めて居る。店の憲法として店前に掲げた一條「借りもあれば貸しもある、貸せば借りは拂はれない——十二時過は御斷り」以て其のズバ拔けた洒脫振りが想見されるではないか。

氏は外に東京鮨屋組合常務理事、麹町區衞生組合常置委員、町會幹事たり。

なぜかこんなに數寄屋橋きのふも今日も緣の富可川

原籍地　山形市香澄町庚申堂
水野子爵家々扶

宮本粂吉

現住所　東京府荏原郡目黒町上目黒四〇七

氏は元治元年十二月生、重厚篤學の教育家として久しく山形地方の教育界に多大の功勞ありしは何人も之を知らざるものなく、今や故柴田氏の後を受け舊山形藩主水野子爵家々扶たり。誠に適材適所と云ふべきである。

氏は明治十三年山形縣師範學校入學、同十六年同校卒業、西五百川常盤小學校訓導を振出しに、十七年五月山形縣師範學校附屬小學校訓導となり、更に長崎小學校、高橋小學校訓導を歷任し、二十二年山形市横町尋常小學校訓導、二十六年第二區尋常小學校訓導となり、其後山形市第二、第三尋常小學校訓導兼校長として最近まで其職にあり、訓育せる子弟無慮數萬に及ぶ。其教育界に於ける功勞顯著なるにより大正四年勳八等に叙せられ瑞寶章を賜はる。

原籍地　東村山郡山邊町大字山邊
水産講習所教官

三浦定之助

現住所　東京市麻布區市兵衛町二ノ三二

氏は明治二十年二月生、山邊小學校卒業後直に山形中學校に入り、同三十九年四月同校卒業、東京水産講習所に入學、同四十三年同所漁撈科を卒ゆ。

卒業後北海道旭川第二十七聯隊歩兵として入營し、同四十四年除隊、縣立長崎水産試驗所技手として四年間在勤の後、職を辭し、大正四年彼の有名なる片岡弓八氏と共に潛水工業株式會社を創立し、同社技師として南洋バラオ島方面に沈没船引揚げの壯擧を試みたることありき。

同八年二月同會社を退き、水産講習所教官として今日に到る。氏は教官としての傍ら全國各地當業者の依頼にて時々教授に赴むく。海底物理學の學理及實地兩方面の研究家として氏は我國屈指の權威者たるは世人の普ねく知る所。

氏二男、二女あり。

原籍地　南村山郡本澤村前明石

西洋洗濯業　**半田直義**

現住所　東京府豐多摩郡淀橋町角筈新町一六三

氏は明治十八年六月八日生。

亡光藏氏四男。

實兄佐平氏は鄉里に於て家業に從事せられ、氏も家業を手傳つて居つたが考ふる所ありて同三十九年一月三日に上京した。

上京後は四谷區駿河屋酒類販賣店に入り商業上の實地修業をした。

後西洋洗濯業の有利なるに着目し、同四十四年三月十日現在の場所に開業し、今日に到つて營業日に增し繁昌を極めて居る。

原籍地　西村山郡西根村西根八二

東京高等工業學校教授　**林宗四郎**

現住所　東京市本鄉區淺嘉町一九

氏は明治十九年三月十九日生、輕部彌右衞門氏の四男で林家を相續した。

大正元年七月東京高等工業學校紡織科を卒業した。

卒業後足利縣立工業學校に奉職。

同六年十一月東京高等工業學校に轉勤して今日に到る。

氏に一男一女あり。

讀書は氏が唯一の趣味。

氏は其性温厚篤實、學生の信望厚し。

原籍地　西村山郡左澤町九〇一
實業家　井上金太郎
現住所　東京府北豐島郡西巣鴨町池袋二〇五一

氏は明治十年二月生。
製絲業者として、將た生絲仲買業者として氏の前半生の著しき活躍は餘りに著明な事實で今更之を喋々するの必要を見ない。現今氏は之等事業の大部分を氏の後繼者に讓り、今後の殘半生を東京方面に於て活動し、震災地の復興に一臂の力を添ふべく決心して居る。現在經營して居る出羽商會（材木問屋、建築業――板橋町元瀧野川二五一九二所在）の如きは其片鱗を示した一例で、其營業も逐次順調に發展して居る。
尙氏は井上玉絲合資會社々長、羽前社製絲株式會社相談役、左澤繭市場株式會社常務取締役の要職にあり。
趣味は圍碁。

原籍地　南村山郡上ノ山町
帝國大學教授
理學博士　吉江琢兒
現住所　東京府北豐島郡西巣鴨町池袋大原一四〇九

正四位勳三等理學博士、陸軍歩兵少尉東京帝國大學理學部教授たる氏は明治七年四月二十九日生、磨礎記氏長男、同四十四年七月家督を相續した。
氏幼にして學を好み、東京帝國大學に入り、明治三十年理科大學數學科を卒へ、更に大學院に學び、同三十二年數學研究の爲め獨逸に留學し、翌年歸朝して東京帝國大學助教授に任ぜらる。
同三十七年一年志願兵となり、陸軍歩兵少尉に任ぜられ、日露戰役の功に依り勳六等に叙せらる。同四十二年昇進して帝大教授となり、大正二年理學博士となる。
同四年六月東宮御用掛拜命、同十年三月廢官。
夫人あき子（明治十五年五月生）との間に男清（大正十一年生）女ふみ子（明治四十年生）まさ子（同四十四年生）ひで子（大正五年生）等あり。

原籍地　北村山郡戸澤村白鳥

會社重役

現住所　東京府豐多摩郡中野町打越一九四〇

仁藤德四郎

氏は明治十五年四月五日生、當年四十五歳の活動盛りである。

氏は明治三十九年より同四十五年迄、戸山學校教官を奉職した。退職後株式會社兵林館軍需品部長となつたこともある。

財界好況時代、柴少將を社長として羽前牧畜株式會社を創立し、自ら其專務を兼ねた。

經營の衝に當つた。其他大倉畜產、日本木材の專務を兼ねた。

現今は土木建築業、特に別莊地の土地經營に從事して居る。

氏に男一人、女一人あり。男は商科大學、女は女子商業に學びつゝあり。

趣味は日本舞踊。

原籍地　西置賜郡西根村草岡八九七

東京商科大學助教授兼豫科教授

現住所　東京市本郷區駒込千駄木町七二

孫田（ソンダ）秀春

氏は明治十九年三月十三日生。

孫田秀助氏の男。

山形縣立米澤中學校卒業後、第一高等學校に入り、同校を卒へて東京帝大に入り、大正四年同大學法科大學を卒業した。

同八年から同十二年迄、滿四年間法律學研究の爲め歐洲に留學。

歸朝後、東京商科大學助教授兼豫科教授として其蘊蓄を披瀝して居る。

著書として法學通論、勞働法總論、我國勞働法規及び判決例等あり。何れも學徒の愛讀する所となる。

三女あり。

原籍地　山形市五日町

實業家　土谷庄藏

現住所　東京市本所區石原町三五

氏は安政二年二月七日生。

明治二十六年氏はモスリン業を研究し其結果を世間に發表した。之れが我國人に始めてモスリンを知られた嚆矢である。

之れと同時に氏はモスリン事業に從事することゝなつたが、間もなく氏の事業を眞似て東京モスリン株式會社が生れ出でたのである。

上毛モスリン會社は氏が創立したのであつて、氏の名聲は我國モスリン界に不朽に輝いて居る。

日清戰爭當時には戰地に送るべきシャツ、ズボン下等を一手に引受けて之を調達し軍事上貢献する所も頗る多かつた。

東京在住既に四十餘年。

原籍地　最上郡金山町

警視廳技師　星川長之助

現住所　東京市淺草區神吉町一一

氏は明治二十一年六月十八日生。

鄉里に於て中等教育を受け、上京して日本醫學專門學校に入り、同四十一年に於て之を卒業した。

卒業後氏は更に帝國大學醫學部專科に入り、同四十三年同科を卒業した。

翌四十四年より新潟縣を振出しに、青森、岐阜縣等の衞生技師に歷任し、偏に實地上の經驗を積んだ。

大正九年拔擢されて警視廳技師に任命、今日に到る。氏の今後の發展は更に刮目して見るべきものあるべし。

原籍地　鶴岡市十三軒町四〇

教育家　**服部大六**

現住所　東京市四谷區愛住町三七

氏は明治二十六年十月五日生。

正厚氏二男。

大正三年三月山形縣立庄内中學校を卒業す。

同六年三月小樽高等商業學校卒業。

卒業の年十二月に東京火災保險株式會社に入社し會社員となつたが、後十五年四月同社を辭した。

辭職後直に東京芝高輪商業學校に入つて教鞭を執り以て今日に到る。

原籍地　山形市十日町四四七

酒類食料品問屋

現住所　東京市神田區今川小路二ノ五

中村源助

氏は明治三十一年九月二十九日生。

幼少から山形市斯波快助酒造店に入り勤續十二年に及び、備に酒類に就て豊富な智識を得たと同時に、主家の營業をして少からず發展せしめた。

東都大震災の年即ち大正十二年の十月上京、北千住驛前に斯波酒造店の出張所を設立し、酒類食料品問屋を開業したが、氏の努力奮闘、營業は日に增し繁昌するに到つた。

然も氏は此の小成に安んせず、營業擴張の目的を以て同十四年二月、神田の山形縣物産營業所を譲受け、該事業を繼續し、以て今日に到る。

氏は他に取立てゝ云ふ程の趣味なく、營業を趣味とし、營業を生命とする即ち最も營業に熱心な性格の持主である。然も一面に於て思慮周密、商機を見ること頗る敏であるから其前途は刮目して見るべきものがある。

氏に一男二女あり。

原籍地　東村山郡長崎町大字達磨寺

○上遠山芳三商店員　**原田光藏**

現住所　東京府北豐島郡高田町雜司ヶ谷七一三

氏は明治二十四年五月一日生れ、當年三十六歳の働き盛りである。

弱冠十五歳にして上京し、本郷都文館中學より、早稲田實業學校に入り、大正二年同校を卒業し、同三年更に日本大學法科に入り、同六年首尾よく同校を卒業した。

卒業後間もなく株式店山一合資會社に聘せられ、同十一年迄引續き同社に勤務し、備さに該方面の智識を收得し、少からず得る所があつた。同年同社を辭すると同時に獨立して山○原田商店を創立、經營の任に當り、大に有價證券の實地研究に從事したが昨年四月故ありて之を止め、本年八月○上遠山芳三店員として其手腕を揮ふこと、なつた。

兜街方面では本縣人として之れまで餘り卓越して成功をした人は見當らない。氏の如きは最も其前途を囑望せらるゝ當業者の一人である。

氏に二男一女あり。

原籍地　山形市

椅子製造業　**佐藤喜吉**

現住所　東京市芝區金杉川口町二四

氏は明治二十八年三月二十二日生。

大正五年上京。

爾來椅子製造業を熱心に修業して其蘊奥を極め、同二年獨立して斯業を開業し以て今日に到り。其營業は日に增し發展しつゝあり。

氏の製作に係る重なるものは上野美術館の玉座及皇族方御使用の椅子、赤坂御所大食堂椅子、赤十字社本部使用椅子、原宿皇室專用驛椅子等で、主に宮內省方面の仕事を引受けて居る。

夫人こう子は山形市出身。

四兒あり。

原籍地　最上郡稻舟村松本

東京時計製造株式會社
支配人

大泉貞治

現住所　東京府荏原郡世田ヶ谷町太子堂五七

氏は明治十八年六月生、稻舟村大泉五郎氏の從弟にして同三十七年新庄中學校を卒へ、卒業後直に横濱倉庫株式會社に入社し、同社に勤續すること前後十三年茲處に專ら實業家として將來社會に雄飛するの素地を作つた。

偶々横濱倉庫社長村野常右衛門氏を社長とせる東京時計製造株式會社（上目黑六七二所在）が創立以來經營の方法を誤りたる爲め、社業頗る不振且つ紊亂の狀態にあり たるを、村野氏の信任を受け之が整理に當ることゝなり、大正十年同社に入社し、あらゆる困難と、あらゆる迫害とを侵して、鋭意之が整理に黽めて漸く之を完了するに到つた。今日では同社の製品は其優秀なる點に於て時計界一般に認められ、昨年來支那方面にも少からぬ販路を開拓するに到れり。

氏二男二女あり。春秋に富む同氏の前途は將に刮目して見るべし。

原籍地　西村山郡寒河江町甲一一六

會計士

佐藤善助

現住所　東京市下谷區上野櫻木町四八
電話下谷六三五九番

氏は明治二十四年八月三十日生、大正七年中央大學法科卒業、卒業後同八年十月迄大藏省に奉職、奉職中法人課稅に就て專門に研究、尙戰時利得稅擔任の功に依り金壹百圓を下賜さる。十月郵船會社の勸誘に依り其の姉妹會社横濱ドック會社營業部に入社し、同十年七月同社を辭し同社の諒解と後援とを以て丸ノ內有樂町三ノ五田中商事ビルディングに日本會計事務所を創設し、專ら會計士監査に從事することゝした。

同十二年震災にて事務所及び本宅類燒の厄に遇ひ、十二月麴町區五番町三番地に事務所を移轉、同十四年東京會計士協會の設立に依り本組合に所屬し、目下評議員長をして會計士界進歩發達に貢献す。其他東京書籍商組合顧問、東京出版協會顧問、東京書籍共立會顧問、合資會社一路社代表社々員等の重職にあり。

夫人キヨ子（二九）東京女子美術學校出身、二女あり。趣味は旅行。

原籍地　南村山郡瀧山村小立五七

復興局隅田川出張所員　**岡崎懋**

現住所　東京府豐多摩郡大久保町東大久保四二一

氏は明治八年二月二十日生、瀧山小學校を出で、小出、仙臺、米澤等各郵便局に勤務したが同二十七年に山形郵便局雇となつた。幾くもなく同二十八年には徵兵として第二師團工兵隊に入り、工兵隊書記として陸軍經理學校に入學した。同三十三年には再び山形局に入り、同三十四年鐵道作業局福島出張所に轉勤した。

同三十七年日露戰役興るや、氏は第八師團に召集せられ、陸軍電信敎導大隊の助敎となり、横須賀、澎湖島司令部附となり、澎湖島では通信所長となつた。同三十九年十一月には召集解除せられて再び山形作業局出張所に入り、同四十年四月には鐵道技手として富山直江津間の工事に從事し、大正元年四月鐵道中部管理局勤務、同二年十一月鐵道院敦賀建設事務所に入り、小濱線、岐阜高山線、丹波峯山線、石川七尾線、富山高山線の工事に從事し、同十三年辭職、暫らく閑地にあつたが同十五年六月再び現職に就いた。氏に一男一女あり。其嗜好は圍碁、謠曲、漢籍の讀書。

原籍地　米澤市　町三五〇

洋服裁縫業　**濱田五兵衛**

現住所　東京市淺草區壽町二八

氏は明治十三年八月十五日生。

鄕里に於て小學校卒業後、洋服裁縫店を開業し、營業日に增し繁榮を極めて居つたが大正二年十二月斷然意を決して上京、下谷區竹町に於て洋服裁縫業を開業し、着々營業の發展を見るに到つた。

同八年二月更に業務發展の爲め現在の場所に移轉し、大に業務の擴張を謀つたが、同十二年の大震火災で不幸にして全滅した。然も氏は更に屈せず再び現在の場所に營業を開始し、日一日繁昌に向ひつゝある。

氏の先代金太郎氏は米澤市に於て酒造業を營み好評あり。

氏の一子五一氏（一七）は父君の許で洋服裁縫業を日夜修業して餘念がない。

原籍地　北村山郡尾花澤町午旁野五八八

東京鐵道局
汐留倉庫發送係長　**星川禮治**

現住所　東京府北多摩郡三鷹村
上連雀狐窪五八八

氏は明治二十八年五月二十一日生、他人太氏の五男。
大正三年山形縣立新庄中學校卒業。
同年早稻田大學高等豫科英法科に入學。
同五年同大學大學部英法科に入り、同八年同科を卒業した。
卒業後直に鐵道局汐留倉庫發送部書記に任ぜられ、同十二年に到り係長の重職に就き、以て今日に到る。
夫人君枝子（三〇）息三人。
趣味は撞球、音樂、碁。

原籍地　最上郡新庄町金澤

精米販賣業　**信夫松藏**

現住所　東京市麻布區森元町一ノ二七

氏は明治二十八年五月三日生。
新庄町金澤信夫萬平氏の長男である。
同町日新小學校卒業。
同校卒業後同町落合町西田呉服店の店員として十一ヶ年も勤務した。
大正八年七月更に志を立てゝ上京し、現在の場所に精米販賣業を開業した。
氏の誠實と努力とは、其後益々業務の發展を見、以て今日の盛大を見るに到つた。

原籍地　米澤市上花澤小國町二二五六

囑托　東京帝國大學

現住所　東京市本郷區動坂町二九

平野象軒

氏は慶應元年十月二十三日生。

其の本名は直文、象軒學人と號し、書及び漢詩をよくす。

上杉藩士。

明治四年米澤市興讓館に入り、其後經史を獨習したのが氏の今日の地位を得たる端緒である。

同十五年より同二十七年迄、西置賜郡に於て小學校教員を勤務す。

翌二十八年上京、更に獨力以て學習を重ね、同三十八年より東京帝國大學囑托として勤務し、以て今日に到る。

氏は極めて謹直なる學者の典型。

原籍地　山形市五日町

時計及貴金屬商　現住所　東京市淺草區新谷町一

三浦吉太郎

氏は明治二十三年三月十五日、喜四郎氏六男として出生した。

大正四年山形市十日町に獨立して時計商店を營み、同年十月三十一日山形市商店改良競技會に於て四等賞を受けた。

同十一年東京日本橋區馬喰町四丁目今津金庫店主からの招聘で上京、工場監督及同店支配人となり、一ヶ年餘勤務して居る中、同十二年の大震災に遭ひ、其後現在の場所に三昇堂時計商店を獨立開業し、勤勉努力、以て今日の隆盛を來した。

氏は其性實直然も商機を見るに敏にして薄利多賣、顧客本位の營業を主として居るので信望あり。

大正元年中野電信隊に入隊して兵役を勤め了せた。

原籍地　鶴岡市

海軍中將　**中里重次**

現住所　東京市赤坂區青山南町三ノ五一
電話青山一二一六番

從四位勳二等功四級海軍中將中里重次氏は中里重吉氏の弟、明治四年八月生、後分家して一家を創立す。

海軍兵學校卒業、海軍少尉となり、大正十一年累進して海軍中將となり、同十四年豫備役に編入さる。

其間橋立、常磐各艦砲術長、軍令部參謀を經て大本營參謀となり、更に海軍省軍務局員となる

更に阿蘇副艦長兼比叡艦長たり、其後再び海軍々令部出仕となり、軍令部參謀、海軍省軍務局員兼海軍大學校長に任ぜられ、春日、磐手各艦長となり、後又軍令部參謀となる。

後海軍省軍需局長となり、再び軍令部出仕となる。更に舞鶴要港部司令官に任ぜられ、而して三たび海軍々令部出仕を拜命す。

尙英國に駐在すること數年、嘗て東部西比利亞に出張せり。

原籍地　南村山郡本澤村前明石二六八

實業家　**本田元治**

現住所　東京府北豐島郡日暮里町
日暮里五七三

氏は明治二十二年十二月三日生、金太郎氏孫。

鄕里に於て學業を修め、同四十一年十二月上京、翌年二月十日海軍造兵廠に入り、大正五年一身上の都合で退職した。

退職と同時に東京鋼材株式會社創立當初から入社し、一ヶ年餘勤務、其後砂村在東京特殊鋼合名會社に入り大正九年迄勤務した。

同年八月現在の場所に合資會社東京特殊鑄鋼所を創立し、其代表社員となり、以て今日に到り、業務逐日發展しつゝある。

他に同十二年より本田鐵工場を創立、社主として經營に從事す。

氏は非常の努力家で以て今日の成功を博した。

二女あり。日暮里平和會々長として公共事業の爲めに盡力さる。

原籍地　鶴岡市新屋敷

洋服裁縫業　**篠原虎雄**

現住所　東京市四谷區坂町一三一

氏は明治二十五年一月十九日生、數學家として有名であつた篠原宗二先生は氏の養祖父で、即ち氏は其養孫となつて居る。宗二先生は弘化二年生八十二歳の高齢であるが未だ以てかくしやくとして壯健に餘生を樂しんで居られる。

從つて氏は幼年時代から東京に於て學業を修めたのであるが、其後京橋區小澤惣太郎洋服店で八年間洋服裁縫の見習修業をした。

同十二年四月から現在の場所に開業し以て今日に及ぶ。

氏の奮鬪努力は氏の營業をして逐日盛大に赴かしめつゝある。

原籍地　鶴岡市大海町丙一

法政大學教授　**御巫清勇**

現住所　東京府北豐島郡瀧野川町田端五三六

氏は明治二十八年四月五日生。

山形中學敦諭富樫秀恕氏二男、三重縣宇治山田市宮後町一〇二御巫清白氏養子となる。養家は代々伊勢大神宮神官として有名なり。

氏に二男二女あり。古文學に造詣最も深し、其經歷大體左の如し。

大正三年四月　山形縣立山形中學校卒業。

同五年七月　國學院大學卒業。

同十一年三月　東京帝國大學文學部國文科卒業。

後法政大學教授となり今日に到る。

原籍地　西村山郡大谷村
土木建築請負業

白田信吉

現住所　東京府北豐島郡高田町大原一五四二

氏は明治十六年四月一日生、土地の名門彌次右衛門氏の次男である。
明治三十六年山形縣立山形中學校卒業、同年義務兵役で靑山近衛歩兵四聯隊に入營し、除隊後即ち同三十九年神戸に赴き、大阪貿易商西松喬商店に入り清國上海支店に一年餘勤務した。
其後清國から歸つて同四十一年には住友倉庫に入り、同四十二年には東京紅葉屋商會に入り、大正二年猪苗代水電に入社し、同五年茨城縣奉職、同十一年から現在の場所に土木建築受負業を開業した。
開業後間もなく、大震災に遭遇したが、氏は國許から數百の土工、人夫を引率し來り、前田侯爵家、安田家を始め諸工事を最も懇切確實に受負つたので各方面の信用も頗る厚い。
夫人憲子は天童藩士で元控訴院判事相川勝歳氏の長女。

原籍地　東村山郡金井村

三玉堂主　荒木三次郎

現住所　東京市芝區新堀町一五

氏は明治二十三年五月八日生。同四十一年志を立てゝ上京、勤勉努力、他日商店主たるの素地と實力とを作るに黽めた。
大正六年二月に到つて獨立して現在の場所に瓦煎餅製造販賣店を開業し、屋號を三玉堂と稱した。其營業は日增し繁榮に赴き、現今は同方面に於て押しも押されもせぬ第一流の商店となつたのを見ても氏の努力の跡が充分に看取される。
氏は常に同業者と協力して、常に製品の改良に黽め、殊に往年の大震災には犧牲的の行爲で同業者の爲めに盡したので、同業者の表彰する所となる。
氏は東京府瓦煎餅製造組合副組長であり、又陸軍の御用も勉めて居る。共進會から賞盃を授與されたことも數度に及ぶ。

原籍地　最上郡稻舟村福田一〇

ゴム引絹綿毛防水雨着製造卸　**庄司新四郎**

現住所　東京市神田區柳原河岸二二號地

電話浪花一九六九番

氏は明治十七年七月四日生。甚十郎氏の四男なり。

明治三十九年山形縣立新庄中學校を卒業し、同年渡米、滯米中は農藝方面に就て研究大に自得する所あり、大正六年歸朝す。

歸朝と同時に共同ゴム製造所に於て技師長として實地に研究する所あつたが、其後信交ゴム商會を創立し、今日にては既に創業十年を重ね、其基礎、信用愈々固し。而して其營業とする所は高級ゴム引マント、コート及各種ゴム引品等の加工にして市内各所に加工場の設備あり。其販路は東京市内の有力なる雜貨店は勿論、遠く大阪、名古屋に及ぶの盛況を見るに到れり。

氏に三子あり。

原籍地　北村山郡高崎村關山下惡戸一〇〇九

名入手拭中形印絆天染物業　**大江庄治**

現住所　東京市淺草區福井町一ノ三

電話淺草四二二七番

氏は明治十九年十月三日生。

大江市太郎氏の次男。

鄉里で尋常小學校を卒業した後、十八歳までは父君の處で農業に從事して居つたが同年大に感ずる所あり、意を決して上京した。

上京後直に日本橋區大傳馬鹽町二荒井染物店の店員となり、染物業の修業をしたが其後二十六歳まで最も熱心に斯業の研究をした上、大正三年五月現在の場所に開業し業務益々發展、今日では使傭人既に三十人以上と云ふ程の非常な營業の繁昌を見るやうになつて居る。

氏の今日あるは凡て獨力奮鬪の賜物であつて全く一篇の立志傳である。今後の發展亦更に大に見るべきものあらん。二子あり。

原籍地　鶴岡市馬場町

辯護士　**郷津茂樹**

現住所　東京府豐多摩郡杉並町阿佐ヶ谷八五七

事務所　東京市四谷區左門町六二（電話四谷五番）

氏は明治二十年二月九日出生、鶴岡市辯護士横山知正氏の二男。山形縣立山形中學卒業、同四十四年東京帝國大學法科大學卒業後、司法官となり、岡山、廣島等の檢事に歷任し、後警視廳監察官たること多年。加藤友三郎內閣に於て遞信大臣秘書官兼參事官となり、清浦內閣では農商務大臣秘書官兼參事官となつた。以て氏が八面玲瓏の才人にして、單純の一法曹にあらざるを見るべし。

目下は辯護士として、懇切に訴訟事務に從事せらる。

氏が唯一の趣味は尺八にして、斯道大家川瀨順輔氏の一高弟として知らる。春秋に富む氏の前途は頗る刮目に値す。

原籍地　南村山郡柏倉門傳村柏倉二八三

順天中學校教員　**黑田清市**

現住所　東京市本郷區眞砂町三八朝盛館方　電話小石川七八二三番

氏は明治十三年八月二十日生、利藏氏の三男である。同三十四年三月山形縣立山形中學校を卒業。大正六年東京帝國大學文學科選科修了。同十四年同大學文學部卒業。

同六年九月麻布中學校教員を奉職し、翌七年一身上の都合にて辭職す。

同八年四月より順天中學校教員を奉職し、國漢文の教授を受持ち以て今日に到る。

氏は專門の學科以外には何等の趣味もなき程學問に熱中する篤學の士にして、全く學者の好典型と云ふべしである。

原籍地　東村山郡天童町天童乙二五二

官吏　茂木整

現住所　東京府荏原郡入新井町新井宿一一一九

氏は明治二十一年七月八日出生。

山形縣立山形中學校卒業。

同四十四年仙臺高等工業學校卒業。

其後鐵道省に入り目下鐵道省技師として建設局計畫課に勤務。

夫人八重子との間に三男一女あり。趣味は旅行。

其の眞蹟

原籍地　米澤市

實業家　山下正雄

現住所　東京府荏原郡入新井町新井宿長田一三〇

氏は明治十八年十一月十二日生。

同三十七年米澤中學校卒業。

翌三十八年、北米合衆國に渡航し、同四十三年に歸朝したが、氏は此間同國に於て高等教育を受くると共に、一方に於て商業上の實地研究を試み、大に自得する所あつたのは云ふまでもない。

歸朝後種々の實業會社に奉職し、或は獨立して事業を經營した。

大正九年より千代田貿易商會に入り、以て今日に到る。

夫人とよ子との間に男三人、女二人あり。

原籍地　南置賜郡玉庭村玉庭三八九二

東京第一無盡常務　**小池莊介**

現住所　東京市麴町區飯田町三ノ一〇
電話四谷三六一九番

氏は明治十五年十一月十日生、現樺太大泊支廳長小池良策氏弟。

同三十五年十月山形縣師範學校卒業、同四十、四十一の兩年、陸軍臨時測圖部班に從ひ滿鮮に出張し、馬賊の捕虜となり、辛うじて一命を全うしたるが如き數奇の運命を辿り、越えて京都大學に入り、大正二年七月同大學法科大學を卒業した。

同二年十一月より同八年一月迄大阪毎日新聞經濟部に勤務し、同年二月より大阪曹達株式會社に入社した。

同十年始めて上京酸素販賣業に從事し今日に到れるが、更に同十三年より東京第一無盡株式會社取締役に就任し、其畫策宜しきを得、業務日に增し發展しつゝあり。

夫人シゲ子は山形女子師範の出身で、氏の京都在學中、城巽小學校に教鞭を取り以て夫君を助けた程の賢夫人である。

原籍地　北村山郡東根町東根甲五四九

自轉車附屬品卸商
三浦商會主　**三浦武雄**

現住所　東京市淺草區吉野町六〇
電話淺草三九六番（高岡乾物店呼出）

氏は明治十四年四月九日生、同二十七年十四歳の時に父君玄達氏を亡つたが氏は實に其長男である。山形縣立山形中學校卒業後、仙臺第一高等學校に入學したが、同校二學年在學中、家事の都合に依つて退學するの止むなきに到つた。

其後同四十年六月横濱税關に奉職し、同年九月には北海道に赴き二ヶ年許り實地修業した、同四十二年三月再び上京、種々活動の結果、同四十五年十月より自轉車小賣業を開店し、爾來業務日を追ふて繁榮に赴き、更に卸商を兼ねるに到つたが大正十二年の大震火災では殆んど全滅の悲運に陷つたに拘はらず、氏の鋭意努力は忽ちにして其營業を復興し、現在では名古屋、濱松、豐橋、大阪、神戸、岐阜等の各地方とも盛に取引をする程の盛況を極めて居る。

氏は學生時代非常に運動好きで、劍道、柔道に達して居る。今日の溢るゝ如き活動力は凡ての源を斯に發して居ると云ふも過言でない。氏に三女あり。

原籍地　西村山郡寒河江町寒河江甲一二一

鹽水港製糖常務

皿谷廣次

現住所　東京府豐多摩郡戸塚町諏訪二五

氏は明治十七年一月生。寒河江町皿谷貞助氏の末子にして一時同町先代安孫子三五郎氏の養子となり其薫陶を受けたるも後故ありて故姓に復した。同三十六年山形中學校を卒業したが、山形時代は同市辯護士菅井定五郎氏に負ふ所亦少くなかつた。

同三十七年一ッ橋高等商業學校に入り、同四十一年卒業、直に鹽水港製糖會社に入つたが傍ら同校の專攻科で商事經理學を一ヶ年專攻し其蘊奥を極めた。

其後間もなく渡臺、同會社本社に勤務することゝなり、經理係長、販賣係長を經て營業部長兼參事となり、大正九年取締役兼營業部長となり、同十三年常務に昇進し以て今日に到る。其他臺灣生藥株式會社常務、臺灣炭業株式會社取締役を兼ね、大阪グワノ製肥所出資社員の一人たり。

夫人は山形市富豪先代渡邊吉兵衛氏の女、趣味はゴルフに讀書。

原籍地　山形市

帝室技藝委員
彫塑家

新海竹太郎

現住所　東京市本郷區彌生町三にノ一七　電話小石川五一〇一番

氏は明治元年二月生、惣松氏長男。

夙に漢學及漢畫を學び、同二十五年彫刻術を始む。

同二十六年小松宮殿下の肖像を彫刻し、尋で相馬頭の囑を受け、名馬八雲及び閑院宮殿下乘馬クロカス號を彫刻す。

同二十七八年戰役、近衞騎兵として應召、金州半島及臺灣に從軍、翌年從軍徽章及び勳八等白色桐葉章並に恩金を賜はる。

同三十二年六月故北白川宮御銅像の元型を彫刻す。後臨時博覽會監査員となり、次で斯業研究の爲め佛國に遊び、爾來彫刻會競技會審査員に擧げられ、同會より優賞を授與さる。

方今帝室技藝委員たり、帝國美術院會員たり、例年帝展に其作品を出品し、我國に於ける代表的彫刻家を以て推さる。

夫人イク子(明治二十一年生)との間に長男覺雄、二男悟市、長女秀子あり。

原籍地　最上郡新庄町五日町清水川町

土田屋玩具店主　**三好惣藏**

現住所　東京市四谷區麴町一三ノ二三

氏は文久三年八月十八日、新庄町清水川町土田治吉氏長男として生れた。明治十四年上京、押繪雛人形製作を研究し、現在の場所に開業し、其後三好姓を繼ぎ秀玉本店として斯界に重きをなして居る。

押繪雛人形師としての氏は實に一種の天才である。三越や白木屋、松坂屋等に時々陳列さるゝ高さ七八尺の大きい羽子板看板を見ても氏が人形師としての天才の閃めきは何人にも首肯される。東京第一流の人形師として好評嘖々たるも亦故ありと云ふべきであろう。

文久三年生れとすれば既に六十四歳の高齢であるが、老いて益々元氣旺盛、其製作欲は年と共に向上して來るのは何と云つても偉なりとせざるを得ない。

原籍地　北村山郡尾花澤町朧氣

活版印刷業
雜貨商店　**菅野高藏**

現住所　東京府北豐島郡日暮里町字谷中本七六七

氏は明治十六年一月七日生。

太郎吉氏二男。

幼少の際不幸父母を失ひ、母の實家楯岡町菊池醫師宅にて小學校に通ひ、高等科を卒へ、其後親戚に當つた菊池豹次郎氏の經營せる山形市山形新報社に入り、活版印刷業を修業し、大に自得する所あつた。

其後同三十六年上京。

現在の場所で活版印刷業日暮里印刷所を經營し、傍ら煙草雜貨切手類の賣捌をなし業務益々繁榮に赴きつゝある。

氏に三男一女あり。

原籍地　北村山郡楯岡町楯岡四六九〇

婦人小間物製造卸商　三澤昌五郎

現住所　東京市淺草區猿屋町一七

氏は明治十六年十二月六日生。

同三十三年出京、日本橋區橋町美濃部商店に十一年間店員として勤務。

同四十四年に到り現在の場所に婦人小間物製造卸業を開業し以て今日に到る。

氏の工場は王子十條、西新井に一ヶ所宛、本所に三ヶ所都合五ヶ所の專屬工場があると云ふ程の盛大さを見せて居る。

然も氏は更に營業擴張の目的を以て、區劃整理を好機會とし、淺草區福井町一丁目に移轉の準備をして居る。

二男四女あり。

原籍地　飽海郡本楯村本楯五六

理髮業　佐藤次市郎

現住所　東京市本郷區駒込動坂町九五

氏は明治三十一年三月十三日生。

本楯尋常高等小學校高等二年修業後、十五の年から酒田町傳馬町の今井末吉理髮店で理髮業をみっちり修業した。

然も氏は之れ丈けで滿足せず、大正二年上京、銀座の阿川高等理髮店其他に就て斯業の蘊奥を極め、同十二年に到つて現在の場所に獨立開業することゝした。

開業日尚淺きに拘はらず、氏の勉強振りは、氏の營業をして日增しに繁昌に赴かしめて居る。

原籍地　西村山郡西里村一四六八

醫師　樋渡光太郎

現住所　東京市下谷區竹町一二ノ七號

電話下谷五七三八番

氏は明治十九年十一月十六日生で、三德氏の弟。

同四十年三月、山形縣立山形中學校卒業。

同四十四年六月熊本醫學專門學校卒業。

其後大正七年十二月迄、產科婦人科濱田病院に勤務す。

同十二年十一月來恩賜財團濟生會下谷病院產科婦人科勤務、同十三年十二月閉鎖と共に、恩賜財團濟生會下谷診療所に轉任し今日に及ぶ。

氏の專門は產科婦人科。

實兄三德氏は目下西里村々會議員として地方の有力家である、

原籍地　東村山郡干布村原町

商業　鈴木庫之助

現住所　東京市本所區太平町一ノ九〇

氏は明治二十三年十一月三日生。

大正三年上京。

現在の場所に酒類其他食料品の卸小賣の業を營んだが、氏の熱心と努力と、且つ營業に勉强なのとで忽ち附近の信用を博し、業務益々發展しつゝあり。

氏は現在に於て太平町梅森町相互會々長、酒類商親商會副會長、太平町在鄕軍人會理事の重職にあり。以て氏が如何に社會に重きを置かれて居るかゞ分る。

他に保險の代理店も引受けて居る。岩舘乘馬倶樂部の理事たり。

氏が各方面に發展しつゝあることが何人にも看取さる。

原籍地　西村山郡本道寺村

宗　敎　家　志田照猛

現住所　東京市芝區愛宕町一ノ七

氏は明治二十三年十二月三日生。

千葉縣成田中學を卒業した後、東洋大學に入り、大正三年哲學科を卒業した。

越えて同十五年前住職隆泰師の後を繼ぎ鏡照院住職となる。

宗敎家として氏前半生の活躍には種々特記すべきことあるが、更に氏の今後は一層の期待を以て世間に見られて居る。

原籍地　鶴岡市榮町一七

東京火災保險會社總務部長　菊池文吾

現住所　東京府荏原郡入新井町新井宿九五一

氏は明治二十年十一月生れ、寛和氏長男。

同三十九年山形縣立庄內中學校を卒業し、同年慶應義塾大學豫科に入り、四十四年本科理財科を卒業し、直に東京火災保險株式會社に入社した。

同社に入社してから或は出で、神戸大阪等の各支店に在勤せられたこともあるが、海上課長、計算課長、外國課長、調査課長から一時名古屋支店長に轉じ、再び本店業務課長を經て現在の要職に就くに到つた。

大正九年斯業視察の爲め、本社から歐米各國に派遣せられ、充分其新智識を豐富にして歸朝された。年齡未だ漸く不惑に達したばかりで其前途は頗る刮目して見るべきものがあろう。

氏の夫人は鶴岡市佐藤德次郎氏長女銀子である。

原籍地　山形市旅籠町六二〇

フエルト草履製造業　東京市淺草區馬道町六ノ五

鈴木浩吉

氏は明治三十二年十二月十四日生。

吉之助氏三男。

同四十五年六月二十八日上京、日本橋區鐵砲町吉村安吉商店（文房具店）に入り、店員として大正八年二月まで勤務した。

其後大に考ふる所あり、フエルト草履製造業の有望なるに着目し、同年三月より同十年三月まで同業に就て深く研究修業し、同月現在の場所にて營業を開始したが、氏の勤勉努力は氏の商店をして逐日盛大に赴かしめて居る。

東京美術草履技術奬勵組合理事。

一子あり。

原籍地　東田川郡長沼村上新田三三

寫眞業　東京市淺草區田中町六八

齋藤德治

氏は明治十七年五月九日生。

齋藤喜市氏の次男、代々農を業とし傍ら質屋業を營む。長兄幼歿の爲めに氏は鄉里に於て一時家業に從事せるも、考ふる所あり、家業を實姉夫婦に渡し、大正十三年十月單身上京の途に就いた。

上京後は小石川區白山方面に於て家作營業をなしたるも、同十四年更に現在の場所に於て寫眞業を兼營し、業務日々繁榮に赴むく。

次弟建藏氏は最も寫眞術に長ぜられ、兄君の業を熱心に助けつゝあり。

原籍地　南村山郡東澤村小白川
明治病院外科　東京市牛込區宮比町一五
現住所
佐藤泰輔

氏は明治十七年十月五日生、綱一氏次男である。
同三十四年山形縣立山形中學校卒業。
同三十八年第七高等學校卒業。
同四十二年東京帝大醫學部卒業。
同四十四年から明治病院外科に勤務し今日に到る。
氏の經歷は斯くの如く順調に坦々たるものであるが、酒や煙草其他の娯樂物にも餘り興味を有せず、專ら其本業に勵精する所正に摸範的の良醫である。
夫人延子(三八)、男四人女一人あり。
長次男は中學に入り、其他は小學に通學す。

原籍地　飽海郡酒田町
岩崎男爵家執事　東京市芝區西久保廣町一一五　電話青山三三二二番
現住所　岩崎男爵家事務所（電話下谷二五六、一九二七、二一〇九番）
宮原喜藏

明治五年九月二十八日生。
同二十六年慶應義塾正科卒業。
同二十八年三菱合資會社に入社す。
同二十九年同社荒川鑛山會計部副主任として任地に在勤す。
同三十一年同社地所部勤務に轉任。
大正五年同社地所部を退き、同年十二月岩崎男爵家執事となり以て今日に到る。
氏には一男二女あり。長女は小菅氏に嫁せり。
氏の趣味は大弓と謠曲。

原籍地　山形市小姓町

土木建築受負業　**折原松藏**

現住所　東京府荏原郡駒澤村下馬引澤四四五

氏は明治九年生れ、斯業者としては最も働き盛りの年輩である。

郷縣を出たのは約十五年以前で、其前は山形方面で土木建築受負業を營んで居つたが、上京してからは星野組、大倉組等に入り、近頃は前田組に入つて、官線紀伊線の工事に從事した。星野組時代には岩越線鐵道工事、桂川水電工事等に從事し、大倉組時代には省線（高架線）工事に從事し、何れも其の手腕を認められ、從つて斯界に信用が篤い。

氏の最大嗜好は銃獵である。十七歳の頃から始めて之れ丈けは年々休んだことはないと云ふ程の獵好きである。

男子一人、女子一人あり。

原籍地　東村山郡長崎町一〇

新聞廣告代理業　**高橋三吉**

現住所　東京府荏原郡目黒町下目黒九一七（大塚山）

氏は明治三十三年十月二日生。

同四十年羽前長崎小學校入學。

大正四年同校高等科二年卒業。

同年早稲田實業學校入學。

同八年同校を終了。

現在では京橋區宗十郎町新聞廣告業正路喜社々員として活動して居る。

齢未だ而立に滿たざる前途有爲の青年事務家である。

通稱東海林三吉。

原籍地　最上郡新庄町
製藥業　佐藤榮雄
現住所　東京市本郷區動坂町二二一
電話小石川四七三一番

氏は明治五年二月生れ。

郷里で永く實業に從事して居つたが、思ふ所ありて上京、大正十三年二月發光製藥合資會社を創立し、發光水の製造販賣に從事した。今日では創業日尚淺きにも拘はらず、格別新聞や雜誌等の宣傳なく、唯服用者の紹介ばかりで一ヶ月既に三千本以上の賣上げを見るやうになつて居るとのことで、之れも製藥夫のものゝ優秀な効能のあるゆゑであるのは云ふまでもないが、一面には亦業務擔當社員として氏の努力の非凡のものあるべきは云ふまでもない。

同社發賣の發光水はよく難治の病を癒したるの實例頗る多く、現に東郷元帥や、立花大將、堀内信水將軍等の如き高名の人々から寄せられた禮狀も頗る多い。

氏は特に俗謠に趣味を有す。

原籍地　鶴岡市寶町
印海陸物產店　工藤誠一
現住所　東京府北豐島郡日暮里町元金杉一九

氏は明治三十一年十月十五日生。

氏の父七郎治氏は嘗て北海道方面で事業に從事し、一時は多大の成績を擧げたが、不幸にして中道に歿し、其爲め氏の少年時代は頗る奮鬪努力の生活を送つて今日の基礎を作り上げたのである。

北海道は函館から上京したのは同四十二年十一月下旬で、陸軍被服本廠、東京電燈會社、河備工務所等に勤務したが、本年に到つて之を辭し、亡父の遺業を繼承せんとするの宿心から、北海道方面を實地踏査の上、愈々現住所に海陸物產業を開業するとゝなつたのである。

氏の緻密な性能は必ずや他日めざましき成功を見るに疑ない。

原籍地　西村山郡谷地町

洋服裁縫業　東京市淺草區新福富町二二　**岸　清　治**

現住所　東京市淺草區新福富町二二　電話淺草二九一六番

氏は明治元年三月十日生。

郷里谷地より仙臺市に出て、洋服裁縫業を練習して居つたが、同二十三年九月上京更に深く同業を修得する所あり、同二十八年神田東松下町に開業、同四十一年九月淺草の現在の場所に移つた。從つて同十二年の大震火災には非常な打撃を受けたのは云ふまでもないことであつたが、氏の實力は忽ち之を恢復し、今では押しも押されもせぬ東京市第一流の洋服裁縫業者である。

氏は本業の傍ら東京洋服商工同業組合淺草區部長（十三年九月より）東京洋裝業進盛會々長の要職を兼ねて居る。以て氏が如何に斯業者間に信用が高いと云ふことが看取される。

原籍地　鶴岡市檜物町乙八

會社員　**佐藤久次郎**

現住所　東京市本郷區弓町一ノ二五

氏は明治十二年七月十五日生、三十郎氏の長男、同三十五年二月明治大學に入學し同三十七年同大學法科を卒業した。

同三十八年山形縣選出代議士熊谷直太氏辯護士開業當時から同氏の事務所に入り、熱心に法律事務の取扱に從事したが、大正十三年八月同代議士が司法省政務次官に任官され同事務所の閉鎖さるゝと同時に、同事務所を退き、新に東洋火災保險株式會社に入社して今日に到つて居る。

氏は人に接する更に城府を設けず、能く談じ、よく語る。殊に好んで學生等の世話をせられ、郷黨の爲めに盡さるゝの厚さは特筆に値する。

氏の趣味は書畫。

原籍地　南村山郡西郷村石曾根三一

西洋家具製造業　**菅野市太郎**

現住所　東京市小石川區丸山町六

氏は明治二十四年三月三日生。石曾根の舊庄屋の素封家の嫡子に生れたが、不幸にして家運衰微したので、氏は奮然志を立て十四歳の弱齢で家を出た。

家を出てからの氏は或は大工となり、時に或は鑛夫となり、あらゆる艱難辛苦を嘗め、遂に東京に於て西洋家具の製造業を開始し、相當の資産を蓄ふるに到つたが、氏は此の小成に安んぜず更に海外渡航を企て船乘り大工として北米、南米、印度を廻航し、大正八年歸朝し、現今は前記の場所で西洋家具の製造に從事して居る。

氏は本職の技術の優れたのは云ふまでもなく、人物亦實直、從つて社會の信用も厚く業務日々發展して居る。

妻てる子、趣味は何よりも本職第一。

原籍地　西田川郡加茂町

會社員　**宮崎正二**

現住所　東京市麻布區狸穴町三〇

氏は明治二十五年二月十九日生。

同四十五年山形縣立庄内中學校卒業。

其後仙臺第二高等學校に入學し、同校を卒業した。

二高から東京帝國大學法科に入り、大正六年同科を卒業した。

卒業後一時横濱增田貿易會社に入社したが、同九年同社を辭し、國際信託株式會社に入り、金融課を擔當し以て今日に到る。

夫人久子(二八)との間に定義(六)睦子(四)幸子(二)の一男二女ある。

趣味は一般の運動競技であるが、碁、芝居等にも亦多大の興味を有す。

原籍地　北村山郡楯岡町

實業家　喜早睦

現住所　東京市小石川區竹早町七〇

氏は明治十六年七月一日生。

郷里の山形縣立山形中學校から、同三十五年三月京北中學を卒業した。

其後慶應義塾大學に入り、同四十年同大學理財科を卒業。

同年九月仙臺第二十九聯隊に入營。

除隊後大正六年鑛山事業を經營し、以て今日に到る。

更に大倉鑛業會社代理店として石炭販賣業を營み、業務益々繁榮に赴きつゝあり。

氏は豪放磊落なる一箇の快男兒。

弓術に傑出す。

原籍地　鶴岡市大寶寺町六二

美術鑄金業　齋藤靜美

現住所　東京市本郷區駒込西片町一〇とノ五

氏は明治九年四月二十五日生。

惣兵衛氏三男、郷里に於て小學校修業後、同二十七年上京、帝室技藝委員鈴木嘉幸先生の許に就き、約四年間、美術鑄金業を修業し、偏に其蘊奥を極めた。

其後山形市で斯業を開業したが、越えて同三十八年出京、臺灣總督府建築に就て、同總督府囑托として同地に赴任し、大に業蹟を擧げたが、大正元年東京に於て工場設立、美術鑄金業を開業し、日增しに盛大を極めて居る。

氏は明治三十九年陸軍參謀本部戰地模型製作に從事したが、其他司法省の大木伯、樺山伯、市川團十郎丈等の銅像建立にも關係し、美術家としての鮮かな手腕を見せて居る。

氏は十三男、三女と云ふ子福者で、長男光夫氏は滿鐵會社長春に勤務す。

原籍地　米澤市
建築設計　中條（チウデウ）精一郎
現住所　東京市本郷區駒込林町二一
電話小石川二二七三番

氏は明治元年四月十八日生。
東京帝國大學建築科卒業。
其後直に文部省に入り、同三十六年同省技師を辭し、歐洲に留學し、英吉利劍橋大學に入つた。
同四十一年歸朝再び文部省に入り、技師となつたが翌年官を辭し、建築設計の事務所を開始し今日に到る。
氏は他に左記重要の地位を占む。
會計檢査院技術顧問員。
建築學會副會長、國民美術協會々頭。
英國ロヤル、ソサエテ、オブ、アーツ會員。
英國皇立建築學會名譽會員。

原籍地　東村山郡鈴川村山家
廣告代理業
廣友社々主　太田卯藤治
現住所　東京市京橋區南傳馬町二ノ三
電話京橋四二九二番

氏は明治十四年一月山形市外山家に生れ、農業に商業に家業を援けて居つたが、同三十三年には徴兵として近衛歩兵第四聯隊に入り、資性温良隊中の摸範として伍長に任ぜられ、やがて日露戰役に出征して曹長に任ぜられた。
同三十九年十一月志を立てゝ上京、簿記學を修めた後、株式會社京華社在職六ヶ年の後退社し、岐阜新聞社他數社の地方新聞支局長として今日に到る。
其傍ら出版業廣友社を經營し、通信工手學校々主たり。震災前までは日本家禽會社ポイント印刷各會社重役監査役として實業界にも名を知られて居つたが、大正十二年の大震火災で無慮數萬の損害を受けた。然も百折不撓の氏は奮闘努力京橋目抜きの土地に自宅を新築する等宛然燒太りの感がある。從つて世間の信用も頗る篤い。
三男一女あり。

原籍地　西村山郡谷地町

三之輪伸鐵合資會社代表社員　堀米康太郎

現住所　東京府豐多摩郡落合町下落合七五三

氏は明治十七年二月七日生、同四十一年十二月上京、大正九年三之輪伸鐵合資會社を創立し、專ら其經營の衝に當り、刻苦精勵以て今日の隆盛を來さしめたのは何と云つても氏が努力の賜と云ふの外はない。

同會社の營業は鐵及鋼鐵の變形加工であつて、日本內地に於ける優れた自轉車のギア材料は始んど同社からの供給である。震災後二年ならざるに米國輸入のギア材料の殆んど全部を驅逐したのを見ても、同會社製品の優秀なると、其苦心經營の迹とが明瞭に看取されるのである。

取引先は東京を主とし名古屋に及び、ギア、クランクを使用する各商店の使用額半分以上は同社からの供給である。

氏に四男一女あり。

原籍地　山形市

鐘淵紡績會社
工務主任

現住所　東京府南葛飾郡隅田町一六一二

依田竹三郎

氏は明治二年十一月廿八日生。

羽前水野藩士高津部多衛氏長男、長じて依田家の養嗣子となる。

明治廿二年山形縣立山形中學校卒業。

直に東京高等工業學校に入り、同廿七年優等の成績を以て同校機械科を卒業。

同廿八年鐘淵紡績會社に入社し、終始一貫同社の爲めに拮据經營し、從つて內外の信用頗る厚く、累進して工務主任の重職にあり。

夫人溫子との間に三男三女あり。

原籍地　最上郡新庄町

實業家　竹村欽次郎

現住所　東京市本郷區西片町一〇
電話小石川一七六六番

東都實業界の雄であり、尙曾て本縣選出の代議士として聲名ありし正六位、勳四等竹村氏は舊新庄藩士古瀨門之助氏の四男である。文久三年一月に生れ、長じて竹村勝行氏の養子となる。初め三田豫備學校（錦城學校前身）豫備門（一高前身）等を經て明治十七年東京帝國大學法學部に入り、同廿一年卒業、大藏省試補となり廿六年地方に出でゝ青森、富山、大阪、新潟等の收稅署長として歷任し、卅一年大藏省に入り理財局國庫課長となる。

同年秋退官、日本鐵道會社に入り、會計課長となり、爾來實業界に活躍し、後小野田セメント會社に轉じ、卅九年波佐見銀山監督となり、四十五年富士身延鐵道取締役に推擧され、現時同社の外帝國商業銀行、株式會社大北炭礦、大日本蠶糸紡績會社取締役、株式會社東北木材、北海中央電鐵、大日本國債各會社取締役たり。

家族　夫人テイ子（明治九年生）。

原籍地　飽海郡一條村

會社重役　小松林藏

現住所　東京府豐多摩郡澁谷町中澁谷九七二
電話青山二〇七六番

東京火災保險株式會社常務取締役。
東京建物株式會社取締役。
東洋火災海上再保險株式會社取締役。

等の重役である小松林藏氏は又兵衞氏の令弟にして文久三年八月の生れ。明治二十七年分家して一家を創立し、今日に至る。

氏幼より學才あり、卽ち笈を負ふて東上し、東京專門學校及英吉利法律學校に入りて法律を專攻し、明治二十二年同校を卒業す。

氏幼より海軍士官たらん事を志し、始め海軍兵學校に入學試驗を受けしが不幸體格檢査に於て不合格となる。卽ち初志を飜して法律を修め、直に東京火災保險會社に入社し、奮勵刻苦遂に同社常務取締役の榮職にあり、爾來累進して今日の地位を得たり。

夫人はタツ子と呼び、四男一女あり。

原籍地　北村山郡東根町東根甲三九一

深瀬病院長　**深瀬周吉**

現住所　東京市麴町區內幸町一ノ三
電話銀座二八九〇番

氏は明治五年十月十八日生、同廿二年東京醫學專門學校濟生學舍に入學、同廿五年東京市に於て內務省醫術試驗に及第し、同年六月順天堂病院に於て院長佐藤進博士に就き外科學及手術を研究し、同廿七年十月郷里東根町に於て開業した。

明治卅年東京傳染病研究所に於て北里博士に就き細菌學を研究したが、氏の研究慾は更に海外留學を思立ち、同四十二年十月獨逸ベルリン大學に入學、四十三年ミュンヘン大學に轉じ、同大學にてドクトルメヂチーネの學位を受け、同年五月墺地利國ウインナ大學に轉じ、プロフェソルドクトルツツケルカンデル氏、フリツシユ氏、フインゲル氏、アイセルスベルグ氏、ホーエニツク氏等に就き外科學一般泌尿器科皮膚科血清學レントゲン科研究の上、大正元年歸朝現在の場所に深瀬病院（外科泌尿生殖器科、皮膚科、レントゲン科）を創立し以て今日に到る。

長男周一（三二）氏は東大醫科を卒業、青山外科に勤務し、同氏夫人イツ子は埼玉縣多額納稅者加須銀行頭取野本三之助氏次女なり。

原籍地　米澤市

海軍大將　**黑井悌次郎**

現住所　東京市芝區白金猿町六一
電話高輪五七七番

正三位勳一等功三級豫備海軍大將黑井氏は慶應二年五月米澤藩士族繁邦氏の次男として生る。即ち明治四十五年分家して一家を創立す。

明治十九年海軍兵學校卒業。廿一年少尉任官。廿六年海軍大學卒業。大正九年累進して海軍大將となる。その間海軍大臣秘書官、常備艦隊參謀、佐世保鎮守府參謀、敷島艦長、佐世保海軍工廠長、舞鶴常備艦隊司令官、横須賀海軍工廠長兼鎮守府艦隊司令官、馬公、旅順各要港部司令官、舞鶴鎮守府司令長官、第二艦隊司令長官等に歷補せり。

尙明治三十七八年戰役に於ては、海軍陸戰隊重砲隊指揮官として旅順攻圍軍に參加し、功に依り功三級金鵄勳章を賜はる。

夫人滋子（明治十年生、細川一之助氏妹）との間に長男三郎（明治卅六年生）長女梯子（明治卅九年生）次女清子（明治四十二年生）等。

原籍地　飽海郡酒田町濱町六

貴金屬印臺
篆刻師

土井豐作

現住所　東京市淺草區南松山町四五

氏は明治十九年十二月十日生。

佐治氏長子にして栴堂と稱す。

郷里で斯業に從事して居つたが、明治卅七年上京、神田區小川町回洋堂で更に一層深く斯業を修業し、大に得る所があつた。

大正十三年現在の地に開業し、業務益繁業に赴きつゝあり。

嘗て大正博覽會、日本美術協會展覽會、東京勸業展覽會、東京彫工會展覽會等に出品して褒賞を受く。

氏は青年時代書家山口半畝氏に就き書道を學び、造詣淺からずと聞く。

原籍地　東村山郡天童町八七

瀨川合資會社
代表社員

小杉繁安

現住所　東京市小石川區中富坂町一
電話小石川七六一二番

氏は明治十九年十月七日生。

郷里天童にて小學教育を卒え、山形縣立山形中學校入學、第五年生より轉じて早稻田中學校に入り、明治卅九年同校を卒業した。

中學卒業後第二高等學校を經て東京帝國大學に入り、大正八年同大學經濟科を卒業し、直に富士製紙株式會社に入社し、監督課に勤務し、秘書を兼ねた。

同十一年東商事株式會社を組織し、自ら其常務となつたが、同年岩手縣多額納稅者にして現貴族院議員たる瀨川彌右工門氏と結び瀨川合資會社を創立し、其の代表社員となる。同社は改良農耕具の製造販賣の外、之れに附帶する幾多の事業を有し、氏の努力活動と相俟ちて逐日發展の氣運に向ひつゝあり。尙氏は滿洲方面に近く或種の企業を計畫中である。

趣味は運動方面。

原籍地　山形市小荷駄町九三

山形製紙株式會社
東京出張所主任

和合貞次郎

現住所　東京市下谷區入谷町一〇六

氏は明治十八年十月生。大正九年長谷川仁氏を社長とする山形製紙株式會社創立時代より同社に入社し、京濱地方大震災の翌年、即ち大正十三年十月より同社東京出張所を設置するや、氏は其主任として專ら經營の任に當り、以つて今日の成功を見たのである。同社の製品は便利瓦、フェルト等所謂建築用材製造の原紙であつて、之れまで外國から三十萬圓以上の輸入があつたのを、同社製品の販路擴張に依つて其輸入額は半減したと傳へられる。以て同社製品の如何に優秀なるかを知ることが出來やう。

同社製品の販賣先は東京では淺野セメント、佐久間建材工業所、株式會社日本建材社、日米アスファルト工業株式會社、合資會社田島應用化學研究所、横濱では東亞紙料工業株式會社、清水工業所、大阪では日本建材工業所、横田工英舍、大連の日本窯業株式會社等であつて、何れも氏の劃策大に與つて力ある。氏に一女あり。

原籍地　東村山郡長崎町三六一

理髪業　畠山吉藏

現住所　東京府豐多摩郡野方町新井四八一

氏は明治十六年四月十九日生、勘治郎氏の次男。

鄉里長崎小學校を出で、明治三十六年上京蓬萊床の徒弟となつて理髪業を修業したが、居ること三四年、歸鄉して父君の業を繼ぎ大正元年秋迄續いた。

同年秋再び上京、牛込區赤城元町三番地に理髪店を開き、大に業務の發展を見たが本年八月十五日野方町方面に轉居して、更に業務の發展を謀り以て今日に及ぶ。

氏に六男二女あり。長女は大妻女學校を卒えて上海にあり、次女は岩佐高女一年生長男は赤城小學校に通つて居る。

氏は十年前父を失つたが、母は八十歳にして今尙壯健。

原籍地　米澤市北寺町西ノ丁三四九五

東京帝國大學
法學部助教授　**我妻榮**

現住所　東京府北豐島郡瀧野川町田端三八

氏は明治卅年四月一日生。
大正九年東京帝國大學獨法科卒業。
同十一年東京帝國大學法學部助教授に任命さる。
同十三年より十五年迄歐米留學。
目下東京帝國大學法學部民法第三講座擔任。
氏は鳩山秀夫博士の高弟で小學校時代よりの秀才と稱せられて居る。
父我妻又次郎氏は大正十一年迄山形縣立米澤中學校に奉職せられた同地方で有名な教育家である。
商科大學教授孫田秀春氏とは義兄弟になつて居る。

原籍地　東村山郡天童町久野本二三

生蕎麥商
最上屋　**黑田吉助**

現住所　東京府豐多摩郡和田堀ノ内町和田一〇七三

氏は明治卅年四月卅日生。
黑田吉藏氏五男、吉藏氏は鄉里に於て製糸業に從事す。
小學校卒業後、直に横濱に出て、生糸卸商店に入り、實地商取引の修業をしたが、大正十年出京、種々の事業を劃策する所あり、同十四年現住所に生蕎麥業を開業したが、氏の熱心な業務振りは、日增しに繁昌に赴きつゝある。
氏は曩に近衞步兵第二聯隊に入隊せられ、現在は後備步兵一等卒である。
一女あり。

原籍地　東村山郡天童町
前陸軍省法務局長
現住所　東京府北豐島郡高田町大原一六六一

松本慶次郎

正四位勳三等松本氏は山形縣士族松本幹氏の二男、慶應二年六月生れである。
明治廿三年東京帝國大學法科大學卒業、法學士の稱號を受く。
明治廿四年十一月第一師團法官部出仕、後第三師團法官部長兼陸軍監獄名古屋衞戍監獄長となる。
更に戰時野戰師團付、韓國駐劄軍法官部長、第四師團法官部長、第一師團法官部長に歷補。
陸軍省法務局長兼理事、實務修習試驗委員長、文官普通懲戒委員たり。更に高等軍法會議法務官たり。大正十三年退職。
此の人剛健公正、而も溫厚眞摯、春風駘蕩の感あり。
家族は妻よし子(明治十六年二月生)男誠太郎(大正十一年生)女貞子(明治四十四年四月生)等。

原籍地　東村山郡天童町
會社重役
旭護謨型製作所主
現住所　東京市本所區向島小梅町五二
電話墨田三五二番

鈴木正志

氏は明治十七年十一月三日出生。
明治四十一年七月山形郵便局から遞信省通信局に轉勤し、同四十四年十二月には官界から退き、直にゴム製造會社に入社し、他日實業家として起つの基礎を作つた。
大正四年八月には硝子型の製造を研究し、同五年に個人經營で旭護謨型製作所を設立して今日に到る。更に大正六年三月東京ゴム工業株式會社創立と同時に營業部長として入社し、同十年九月迄在職、大正十一年九月日本クリスタル護謨株式會社創立と同時に取締役支配人となつたが今日でも取締役の一人である。次に大正十四年九月には旭護謨製作所を箇人經營で設立し、醫科用ゴム製品の製造販賣を廣く開始して居る。
大正十五年一月東京ゴム同業組合幹事となる。

原籍地　東田川郡齊村齊藤川原二四
石鹸雜貨店　**渡部繁吉**
現住所　東京市淺草區田中町九〇

氏は明治三年十一月四日生で、同村資産家として有名な故渡邊五右衛門氏の長子である。

郷里に於て學業を修めた後、先考の處で家事の手傳ひをして居つたが、明治二十八年大阪に出で難波病院事務員として永年勤續、大正六年上京、本郷區駒込千駄木町一七三番地に居を占めて書畫骨董の販賣に從事した。

越えて大正十五年五月現在の場所に移轉し、石鹸其他の雜貨店を開業することゝしたが、其營業日增し繁榮に赴きつゝあり。

氏に一男二女あり。長男は孝吉(一九)氏と云ひ、主に現業に從事努力されて居る。長女は高等女學校二年生。

趣味は書畫骨董類。

原籍地　米澤市他屋町一六四九
會社員　**渡部庸之助**
現住所　東京府荏原郡目黒町上目黒五九八

氏は舊米澤藩士渡邊虎太郎氏三男で、明治二十九年四月廿九日生。

大正五年四月山形縣立米澤中學校を卒業し、直に上京して法政大學豫科に入學、大正七年九月中央大學大學部政治經濟科に轉じ、螢雪の功空しからず、大正十年同大學を卒業した。

氏は家庭の事情や、一身上の事情から大正七年九月在學當時から粟津清亮博士を以て社長とする日本傷害保險會社に入社して居つたが、同じく十一年初同社が中央火災傷害保險會社と變更するに先立ち、横濱火災海上保險會社に赴き火災保險事務を修業すること滿一ヶ年、同十一年八月再び中央火災傷害保險に戻つて火保課に奉職して今日に到る。

保險界の新人である。

原籍地　山形市香澄町

元官吏　**山上幸平**

現住所　東京府荏原郡入新井町新井宿長田二二

氏は嘉永六年八月八日生。

新潟、長野縣等の各税務署長を歴任し、官界生活實に二十有四年の長日月に達した。

此間氏が官吏として最も忠實に邦家に貢献したるの事實は特筆に値する。

圍碁に造詣最も深し。

氏の男秀雄氏は東京高等工業學校卒業後芝浦製作所に勤務す。

原籍地　米澤市

横濱正金銀行取締役　**小田切萬壽之助**

現住所　東京市芝區白金三光町二六三　電話高輪五五四四番

米澤藩士小田切盛清氏長男、明治元年一月廿五日生。

明治十九年外務省より清國天津に留學を命ぜられ、翌年領事官書記生となる。

爾來公使館書記生、二等領事、一等領事を經て卅五年總領事として上海に駐在す。

此の間各國各地に在りて日支易易に貢献す。亦東亞の經濟狀態に精通し、識見卓拔殆ど斯界獨歩と稱せらるゝもの、即ち此の間に修養したるものである。

明治卅八年官を辭し、横濱正金銀行に入り東洋主管に擧げらる。

後清國に於て營口水道株式會社取締役たりしが、現在は横濱正金銀行取締役である。

家族は夫人けい子（明治八年生、東京英和女學學校卒業）長男武林（明治卅年生、法學士）その夫人宮子（明治卅八年生、板倉女學校卒業）其の他。

原籍地　北村山郡東郷村野川一五〇九

松浦内科
醫院主　**松浦清治**

現住所　東京市本郷區森川町一
電話小石川三五二二番

氏は明治十四年五月六日生、惣次郎氏の次男。
明治四十四年四月内務省醫師試驗に及第。
其後東京帝國大學醫學部に於て國家醫學講習を受け、其他小兒科、細菌血清學、解剖、法醫學等を學習した。
同十五年一月より大正五年三月末日迄帝國大學醫學部内科學教室介補囑托、三浦内科教室に勤務した。
大正三年以降現地に於て開業、以て今日に到る。

原籍地　米澤市

海軍中將　**釜屋六郎**

現住所　東京市麻布區本村町一七
電話高輪七七六一番

正四位勳二等功四級海軍中將釜屋六郎氏も亦吾が鄕縣が生んだ逸材。
その經歷を見るに、先づ氏は辰太郎氏の令弟として生れ、誕生は明治元年一月と註せらる。而して明治卅四年分家一家を創立せり。
明治廿年海軍兵學校を卒業し、廿二年海軍少尉に任ぜられ、爾來累進して大正八年海軍中將たり。
氏がその間の閲歴は、東宮付武官、横須賀鎮守府參謀、千歳、安藝、霧島、各艦長竹敷要港部參謀、海軍省水路部長、東京市區改正委員、港灣調査部委員、朝鮮總督府附武官、第二艦隊司令長官、等なり。
因に氏の家族は、夫人ノリ子(明治十六年十一月生)、海軍中將野元鋼助氏長女)との間にある二男三女、即ち俊夫(四十一年生)二女鶴子(四十三年生)三女篤子(四十四年七月生)二男正誠(大正九年八月生)長女壽子(卅四年生)ドクトル、オブ、フイロソフイ栗原信氏に嫁す。等。

原籍地　西田川郡袖浦村

自働車業　**奥山與藏**

現住所　東京市麹町區下二番町一番地
電話四谷三九五五番（呼出）

氏は明治二十一年の出生。

明治四十二年上京。自動車業の練習をなし、自得する所あり。

明治四十五年獨立して自動車營業を開始し、其業務逐次繁榮に赴き、今日に於ては東都屈指の自動車業者として目さるゝに到れり。

氏は自動車業を獨立經營するの傍ら、東京自動車組合理事の重職にあり。以て氏の如何に斯界に重きをなすかを知るべし。

氏は年齒未だ三十九歳、今後の成功は大に刮目すべきものあるべきは云ふを俟たず氏は快活にして、敢爲の氣象に富む。從つて交遊最も多し。

原籍地　米澤市地番匠町四三八四

稻畑商店
機械部主任　**川崎武夫**

現住所　東京市本郷區駒込林町二三〇

氏は明治廿八年七月四日生、熊次郎氏長男である。

大正四年米澤中學校卒業。

後米澤高等工業學校に入り、大正八年同校紡績科を卒業す。

同年四月株式會社稻畑商店大阪本店に勤務す。

同十年五月東京支店（日本橋區堀留町一ノ五）轉勤、機械部主任として今日に到る。

氏は最も眞面目な人格の持主で、自己の職務には最も熱心である。

趣味は刀劍書畫等で、近來謠曲の稽古を更に始めて居られる。

原籍地　山形市旅籠町二四六

慶應醫科大學教授　**西野忠治郎**

現住所　東京市四谷區東信濃町二八

電話四谷四三五九番

正六位、醫學博士慶應醫科大學教授、慶應大學附屬病院內科部長西野氏は米澤市の生れ。藤田茂八氏の二男として明治十一年五月廿六日に生れ、明治卅一年八月山形市西野愼一氏の養子となる。廿四年米澤中學興讓館入學。廿九年卒業。同九月第四高等學校三部入學。卅二年七月卒業。同九月東京帝大醫科大學入學。卅六年十二月卒業卅七年一月より十二月迄同大學病理學教室に於て山極教授の下に病理學を專攻す。卅八年同醫大副手拜命。卅九年九月傳染病研究所二部事務取扱囑託。四十三年五月鄕里山形縣立病院濟生館の內科醫長として招かれ、大正三年七月學位請求論文『バラチブス菌と鼠チブス菌との比較研究』に依り醫博授與、八年高等官四等に昇叙。九年六級俸となり同年依願辭職山形縣衞生技師となる。同年依願辭職同時に日本赤十字社山口支部病院長となり、間もなく辭し慶應醫科大學教授となり、更に同附屬病院內科部長を兼ぬ。專門は內科學。家族は夫人貞子及び養妹弟三人。

原籍地　米澤市元籠町三二一八

辯護士
辨理士　**小林一郎**

事務所　東京市麴町區丸ノ內東京海上ビルディング五階
電話牛込四七八〇番

氏は明治廿三年四月十二日生、鐵道院參事から政界に乘り出した有名な故小林源藏代議士の長男。同四十四年東京帝國大學法科大學に入學、獨逸語を兼修し、大正四年五月同大學を卒業し、同年六月大學院に入學した。卒業後、同六年二月檢事に任せられ、七月判事となり、同九年三月判事を退職して、翌四月英國に留學し、ロンドン、ミッドル、テンプルに入學した。

同十二年一月バリスター、アットロローの學位を受け、同時に英國辯護士登錄、バリスター、ジェー、ビー、アスピナル氏事務所に於て英國アドミラルティー、コート關係事件就中船舶に關する事項を研究の上、同年十二月歸朝、十三年一月辯護士、辯理士名簿登錄、爾來前記事務所に於て一般法律事務を取扱つて居る。

氏に男一人、女一人あり。趣味は乘馬、狩獵、ゴルフ、就中乘馬を最も得意とす。

原籍地　山形市

千代田火災保險株式會社
横濱支店長

片山政庸

現住所　神奈川縣神奈川町東伯樂二〇二九
電話横濱三九二九番

氏は明治十四年生。
縣立山形中學校卒業後、慶應義塾に入り、明治三十八年同大學理財科を卒業す。
卒業後日本銀行に入り、それから時事新報、東京朝日新聞に入社し、操觚界の新人として椽大の筆を揮つたが、大正二年千代田火災保險株式會社創立と同時に同社に入社し、全く實業界の人となり、本店契約課長から、同七年に福岡支店長として十二年迄在勤し、抜群の成績を擧げた。
大正十二年震災前横濱支店長に榮轉したので、震災には遭遇したが幸に事なく、今尚同支店長として多數社員と共に活躍して居る。
氏に一男二女あり。嗜好は圍碁で所謂下手の横好きである。

原籍地　北村山郡楯岡町大字湯ノ澤
見龍堂內科醫院長

矢尾板四郎

現住所　東京市日本橋區濱町一ノ三
電話浪花一六五〇番

明治十五年六月十四日は吾が矢尾板氏の誕生日である。舊姓佐藤。
學歴として山形中學、第二高等學校を經て明治四十年十二月東京帝國大學醫科大學卒業。四十一年附屬醫院三浦內科に入學して助手となる。
明治四十三年七月獨逸留學。大正二年十月歸朝、內科專門醫開業。自ら見龍堂內科醫院を設けその長となる。
大正五年八月五日學位請求論文『心臟膜様部及び房室間瓣の發育及び之に關聯する心臟畸形に就て』に依りて東京帝國大學醫科大學教授會より醫學博士號授與。
家族は夫人りん子（矢尾板信一氏長女）との間に長男孝一、次男忠夫。長兄佐藤直信氏（楯岡町長縣會議員）次兄白田彌右衛門氏（東村山郡藏增村長）三兄吉田良三氏（第百銀行員）等の人材を輩出す。

原籍地　西置賜郡長井町

畫家　梅津秀夫

現住所　東京府北豊島郡瀧野川町田端一八二

氏は明治三十六年生。

大正元年上京。

同八年小石川區春日町川端畫學校に入學し、同十二年日本畫科を卒業す。

卒業後京橋宗十郎町一五國文ビル内パレット圖案社に入り今日に到る。

同社の營業科目は圖案、文案、印刷等で氏は圖案方面に其特技を揮ひ、且つ藝術の研究に日夜沒頭して居る。

氏の趣味は筑前琵琶で、既に素人放れのした妙境に達して居る。

氏は星耕と號す。最も未來ある青年美術家の一人。

原籍地　西村山郡谷地町

會社員　吉田信男

現住所　東京市赤坂區榎坂町三

氏は明治廿五年三月一日生。

權二氏長男。

大正六年東京帝國大學法科卒業。

同年十二月一年志願兵として歩兵第二十九聯隊に入營し、除隊後、陸軍豫備一等計手に任せらる。

同七年十二月矢野上甲合名會社に入り、同九年紐育支店に赴き、大に其手腕を揮つたが、同年四月歸朝、再び本社に勤務することゝなつた。

其後大正十二年九月に到り扶桑海上保險株式會社に入り以て今日に到る。

氏の趣味はテニス。

夫人智惠子との間に信子(四)智雄(二)の一男一女あり。

原籍地　米澤市

衆議院議員
理學博士　宮島幹之助

現住所　東京府豐多摩郡杉並町高圓寺五五五

氏は明治廿五年八月十三日士族家久氏の長男と生れ、廿六年先代酉藏氏養子となり、廿八年八月家督相續。廿五年第一高等學校に入學、廿八年七月第二部卒業。同年九月東京帝國大學理科大學入學。三十年持待生となり三十一年動物學科卒業、理學士となり同年大學院入學、無脊推動物、特に咬腸類を專攻す。三十年七月東京帝國大學動物學講師囑托となり、同年九月大學院退學。十月京都大學大學院入學。病源原蟲專攻。卅四年二月京都大學醫科大學講師囑托。十月臺灣地方病及傳染病調査委員會醫務囑托。卅六年一月更に痘菌製造所技師に任ぜらる。卅八年四月傳染病研究所技師に任ぜらる。四十年七月醫學博士を授けられ、後更に理學博士となる、尙、北里研究所技師、衞生調査會委員等に歷任。尙國際聯盟總會機關常設委員會帝國代表他帝國代表等に任ぜられて渡歐數回。著書數種、大正十三年代議士當選現在に到る。

米穀仲買業　原籍地　山形市七日町

現住所　東京府豐多摩郡淀橋町柏木六八

氏は明治三年三月四日生。

上京後既に二十年の歲月を閱し、專ら米穀仲買業に終始し來つた。波瀾の多い相場界に出入して今日の成功を見るに到つた氏半生の歷史は慥に傾聽すべき或物を持つて居るは云ふまでもない。

刻下米穀仲買業に從事さる。

原籍地　東村山郡寺津村寺津二四〇

宗教家　**大木俊英**

原住所　東京府豐多摩郡和田堀ノ内町和田一〇五一長延寺

氏は明治廿九年十月九日生。東村山郡大郷村中野鈴木喜代治氏五男。大正十五年二月同郡寺津村大木家の養子となり、大木姓を名乘つた。東洋大學、日本大學に入り研學に勉めたが、氏は專門の宗教研究の傍ら專ら社會事業の研究に志した。

大正十四年長延寺住職となり、以て今日に到る。

氏の趣味は社會事業にあり、將來斯界方面に活動せんとする熱心なる志望を有す。齡未だ而立を越えた許りの宗教界の新人、其前途は更に大に見るべきものあらん。

原籍地　山形市

鐵道省技師　**林清憲**

現住所　東京府荏原郡目黑田園都市東臺北一七

山形縣士族富川清光氏の令弟である氏は明治七年五月に呱々の聲を學げ、卅四年七月先代兎喜太郎氏の養子となり、大正六年家督相續せり。

明治廿九年東京高等工業學校機械科を卒業し、直ちに福岡合資會社に入る。卅一年北海道廳事業手に轉じ、卅五年鐵道機械學研究の爲英米に留學し、卅七年コーネル大學鐵道機械科卒業。歸朝するや請はれて鐵道作業局雇となり、四十年帝國鐵道廳技師に轉勤。大正九年更に鐵道省技師となり監督局技術課勤務たり。

大正十二年歐米に出張、十三年七月歸朝現今は鐵道省技師たり。

家族、夫人せん子（明治十年八月生）との間に男政（明治卅八年十一月生）二男卓（明治四十年一月生）二女文子（大正四年二月生）三女清子（大正八年五月生）等。

因に長女錦（明治卅四年七月生）は山形縣人濱田仲儀二男貞一郎氏に嫁せり。

原籍地　南村山郡上ノ山町鶴脛町三三九

賣藥業　**橘　馨　枝　郎**

現住所　東京市日本橋區本石町四ノ三二
電話大手三四六〇番

氏は明治十一年四月二十四日生。
明治三十二年上京したが、奮闘努力、漸くにして同三十六年から現在の場所に住居を定めて賣藥營業に從事し、業務猶且つ日々發展の途に就いて居る。
氏には二子あり。
長子は十九歳で馨氏と呼び、東京醫學專門學校在學中、二男は錦城中學に在學して居る。
氏は交際に巧みな、溫厚の好紳士である。

原籍地　北村山郡楯岡町

清雅堂印房主人　**丹　野　喜　八**

現住所　東京市日本橋區三代町一七
電話茅場町六九六番

氏は明治廿五年六月二十七日出生で、京助氏の六男である。
鄕里に於て小學校卒業後、明治四十三年二月上京。日本橋區三代町一七川島印舖に入店修業したが、十年勤續と云ふ點で表彰された程であるから氏の辛抱力も並大體でなかつたことが分る。
越えて大正十年四月一日現在の場所に於て獨立開業して今日に到り、業務日增しに繁榮に赴きつゝあり。
氏は現在日本橋中央會幹事、東京印刷業組合員である。
氏に二子あり。
趣味は書畫骨董篆刻類。

原籍地　山形市小姓町三九

アコヤ商店主

出村貞吉

現住所　東京市下谷區御徒町一ノ一六

氏は明治廿一年三月十五日生、山形市五日町三浦喜四郎氏五男で、幼時小姓町出村家の養子となる。

大正十二年志を立てゝ上京、現住所御徒町に店舗を置き本所區南二葉町に交通宣傳用公德ベル製造場を設けて盛に活躍し、次にオバーバイ並に自轉車業を營み、更に本年アコヤ王冠抜及ゴム乾燥器械を發明し、自身製造販賣、世評頗る嘖々たり。

特許を受けたアコヤ王冠抜はビールサイダーの栓を抜きたる場合の發泡を巧みに防げる栓抜きで、且つ一寸體裁の良いものである。更に近く發明せる出村式ゴム乾燥機は蒸汽の調節及びメーターを具備し、僅かの燃料にて十分間に容易に且つ完全にゴムの破損を修理し得る特長を有し、斯業關係者に貢獻すること少からざる破天荒の發明品である。

原籍地　最上郡新庄町

諸會社、銀行重役

小笠原鑛次郎

現住所　東京府荏原郡大井町倉田三三六五　電話高輪一〇二一番

十七銀行、大阪共立銀行取締役、起業株式會社取締役、沖電氣、中央開墾各株式會社監査役。以上の肩書のある小笠原氏は萬延元年十二月十二日、最上郡新庄町の小笠原昇氏の次男として生れたのである。

夙に栃木縣師範學校を卒え同校附屬小學校に教鞭を執る事數年、後志を立て都門の人となり明治法學校に學び翌年中江氏の佛學塾に入り在塾五年歴史、法學、哲學を研究し、後明治法律學校に入り、同二十二年卒業。後大藏省銀行課に出仕するや本邦銀行界の幼稚なるを慨き佛國貿易論を譯して大に斯界の參考に供せり。次いで安田銀行に入り、保善社の事務の任に當り、計畫調査事務の任に就き、その敏腕安田翁の知る處となり保善社の理事に擧げられ以て今日に到る。

原籍地　東村山郡天童町天童乙ノ二六一

鼻緒商　**谷　榮　治**

現住所　東京市淺草區千束町三ノ一七

氏は明治廿七年三月十五日生。

谷吉晟氏の四男で、秀夫氏の次弟、秀夫氏は永く山形中學校にて教鞭を取らる。

郷里の小學校を卒業後、大久保兵次氏の處で鼻緒職見習ひとなり、斯業の修業をして居つたが、明治四十四年七月意を決して上京した。

上京後は淺草區田町の藤田商店で見習ひとなり、鼻緒業の實地修業をしたが、大正七年千束町二ノ二七四で開業し、漸く盛運を見んとする際大震災に遭遇し、震災後現在の場所に移轉、營業を繼續し、以て今日に到る。

氏に二女あり。

原籍地　山形市旅籠町二七六

都新聞記者　**松　山　清　吉**

現住所　東京府豐多摩郡野方町上沼袋二七六

氏は明治廿六年一月廿日生。

山形市第一尋常高等小學校在學中知事より硯箱一箇受領、高等一年にして半途退學山形日報社事務員となり、後同社記者となる。

大正元年上京、日本區橋蠣殼町大勢新聞社に入り約二ヶ年英獨二ヶ國語を研究したが、强度の神經衰弱に罹れるを以て之を放擲し、後米相場を研究し、大勢新聞商況記者として十年勤續した。

大正十一年都新聞の商況部大擴張と共に入社し、米穀部主任となり、其呼物たる風雲錄は松生の別號にて同氏の執筆に係るものである。『米相場の見方』の著書あり。

趣味は尺八、將棋等。文藝物を愛好す。

原籍地　飽海郡上郷村山寺一七九〇

法政大學教授

現住所　東京府北豐島郡西巣鴨町池袋大原一四五二

竹岡勝也

氏は明治廿六年十一月十日生。

明治四十四年山形縣立山形中學を卒業し、直に仙臺第二高等學校に入り、大正四年同校を卒業し、東京帝國大學に入り、同七年同大學文科史學科を卒業した。

卒業後內務省神社局囑托(大正七年より十三年迄)となり、大正十二年法政大學教授となり、大學部に於て日本文化史、日本思想史を講じ、豫科には日本史、高等師範科には日本史及東洋史の講座を擔任す。

其他大正十四年より立教大學史學科、同十三年より東京女子大學に日本史、今十五年より武藏高等學校に日本史を講じつゝあり。

著書として日本文化史(平安朝末期)あり、研究中の日本文化史は近く發表の豫定。

夫人芳子(二九)女二人あり。趣味は能樂。

原籍地　最上郡新庄町

慶應大學醫學部教授學習院講師

現住所　東京市麻布區本村町一一〇　電話高輪四五二二番

戸澤富壽

氏は明治廿三年十二月二十三日生で、舊新庄藩主戸澤子爵の叔父に當る。

麻布飯倉小學校を出て、學習院を經帝大に入り、大正六年同大學理科動物學科を卒業した。

卒業後更に大學院に入り研學に勗めたが、大正九年慶應大學醫學部教授となり、動物學科を擔任し、大正十三年母校學習院で自然科學の講座を受持ち以て今日に到る。

尙氏は大學在學中英獨二箇國語を學ばれた外、外國語學校夜學部に入り佛伊兩國語を專修せられたので、外國語の智識は頗る多方面且豐富である。

氏は音樂、繪畫、寫眞等に趣味を有す。

夫人和子、松浦伯三女、二男あり。

原籍地　鶴岡市檜物町字筬橋二四

裁縫業
山形屋主

中村卓造

現住所　東京市神田區西福田町三

氏は明治十八年四月三日生。

明治卅年八月三越の裁縫所に入つて七年間修業、即ち同卅七年を以て卒業した。

翌卅八年十二月、山形第卅二聯隊に入營し、翌卅九年四月臺灣守備隊として派遣せられ、同四十年十一月除隊、再び三越和服裁縫所に入つて一層斯業を研究した。

其後大正七年十一月に到つて三越の後援に依り、三越專屬裁縫所を經營し、多數の生徒を收容、教授して今日に到る

氏の熟練した技工と、有力な三越の後援から氏の事業の日に增し盛大に赴きつゝあるは云ふまでもない。

原籍地　山形市

遞信省技師兼
遞信官吏養成所技師

佐伯美津留

現住所　東京市麻布區霞町二三　電話青山六五〇四番

正五位勳四等、遞信省技師兼遞信官吏養成所技師佐伯美津留氏は山形縣平民佐伯收氏の長男、明治四年三月の誕生、明治三十七年五月家督相續す。

氏はその始め海軍兵學校に入りしが、後轉じて遞信省に入り、明治二十七年遞信省電氣局電氣試驗所技工となり、二十八年英國に派遣され、大に技を磨き、歸朝後遞信技師となる。

三十八年通信技手に任官、三十九年同技師となる。更に越えて四十年には遞信技師に累進、大正五年遞信局技師兼遞信技師たり、再び英米に出張を命ぜらる。

大正九年萬國通信會議に派遣され、目下本省勤務たり。

夫人はモト子明治七年八月生、山形縣人遠藤周助氏の妹なり。二男三女、長男を信と云ふ、二女はヒデ子、三女をチヱ子、二男を潔と云ひ、長女與志子（明治三十一年生）は愛知縣人神田氏に嫁せり。

原籍地　最上郡船形村船形三六〇ノ三

東京府立工藝學校
授業　囑托

沼澤孝英

現住所　東京府北豐島郡瀧野川町田端四九三

氏は明治四年三月十九日生、直吉氏三男である。
明治二十五年山形縣立山形師範學校卒業。
同三十五年七月哲學館卒業。
其後新潟縣立工業學校、宮城縣立工業學校等の教員を奉職したが、更に東京府立工藝學校教諭となり、本年高等官五等待遇從六位で病氣に依り退職し、更に本年三月三十一日附を以て同校授業囑托となり、修身及教育の二科目の教授を擔任して居る。
氏に一子あり。當年十八歳で府立第六中學校五年生。
氏の趣味は讀書に習字。
最も眞面目にして敬虔なる好箇の教育家。

原籍地　鶴岡市大海町戊ノ一二

千代田壽司店主

野田克太郎

現住所　東京府北豐島郡日暮里町日暮里二五五

氏は明治廿九年五月八日生。
野田保信氏長男。
鄕里に於て小學教育を受け、其後北海道根室で中學に入つたが第四學年にして家事の都合に依り退學した。
其後考ふる所あり、大正元年上京、各地で種々商業上の見習をしたが、大正十二年五月に到り現在の場所に千代田壽司店を開業し、營業日增しに發展しつゝある。
氏に一男一女あり。氏之れ迄の半生は全く努力奮鬪の生活と云ふも過言でなく、從つて今日の成功を見たのも亦當然の結果と云ふべきであらう。
軍籍は陸軍騎兵一等卒。

原籍地　米澤市下矢來町

畫家　計見東山

山岳開發會幹事

現住所　東京府豐多摩郡中野町西町三五一四

氏は安政三年正月廿一日生、新五右衞門氏の長男、舊米澤興讓館で漢籍を修め、青年の頃同藩書家濱崎木麟から南北合法の畫を學び、中年になつて仙臺の畫家山内耕烟に就て純南派の筆法を修め、傍はら米澤藩の儒者窪田茂瑞及び坂蘭溪に就て漢詩を學び、又書法は始め子昂を習ひ、其後昌を修め、南宗畫家として世に立つに到つた。

明治廿六年上京、一時砲兵工廠等に入つたが、間もなく本業の畫家となり、其間出版業又は著述等に從事し以て今日に到る。

氏は一面に於て又熱心な山岳研究家である。大正八、九年頃から羽前岩城國境の山岳開發を其半生の事業として着手し、遂に昨十四年三月羽前岩代國境山岳開發會の創立を見るに到り、氏は其幹事として熱心に東奔西走の勞を執つて居る。

氏に一女あり。

原籍地　東村山郡天童町北目

割烹講師　和久井淺之助

現住所　東京府豐多摩郡澁谷町下澁谷六一九

電話青山三五九三番

氏は明治九年一月生、幼少より割烹業に興味を持つて居つたが、明治廿四年弱冠にして上京、帝國ホテルに入り割烹業を熱心に修業して以て今日あるの地歩を作つた。

明治廿九年第一師團入營、卅年一月臺灣守備隊附となり卅二年十一月に凱旋した。明治卅七年三月には日露戰役に第一師團二聯隊附として旅順奉天に轉戰し、上等兵となつて卅九年に凱旋し、勳八等白色桐葉章を賜はつた。

氏の割烹業に造詣の深いのは永く女子學習院、山脇高等女學校、實踐女學校、聖心女學院、女子高等師範等の割烹講師となり其訓育せる子弟數萬に及んで居るのを見ても分る。各宮家へも出入して割烹の御指導も申上げて居る。御前割烹の光榮にも度々浴して居る。其著書『西洋料理』は實用向として世間に重寶がられて居る。

氏に男子二人、女子二人あり。趣味は家具類の蒐集。

原籍地　米澤市

東京高等師範學校教授
東京帝大文學部助教授

保科孝一

現住所　東京府豐多摩郡中野町大塚六二五
電話四谷四四三六番

氏は文學士にして東京高等師範學校教授たり、更に東京帝國大學文學部助教授兼任たり。山形縣士族保科忠次郎氏長男にして明治五年九月生れなり。

幼にして學才衆童に秀で、郷里の普通學を卒るや出郷高等學校、東京帝國大學に學び明治三十年東大文科大學國文科を卒業せり。しかも氏更に同大學大學院に學ぶ事數年、始めて教育界に身を投じ、東京高師に教授たり。更に東京帝大文學部に助教授たり。

氏教鞭を取るや熱誠、殊に後進の道を拓き、更に學界に貢献する處多く、功に依つて正四位勳五等に叙せらる。

家族は夫人みさを子（明治十七年一月生）及び男禮一（明治三十八年六月生）女終子（明治四十年一月生）恭子（大正三年一月生）等。

原籍地　飽海郡上郷村山寺二〇三

旅館業
下宿屋業

桃井文夫

現住所　東京市本郷區駒込蓬萊町二五

氏は明治六年三月十五日生。

郷里の醫桃井文庵先生の次男。

明治廿六年入隊して歩兵上等兵となる。

同卅一年山形縣巡査を拜命、同四十四年警部に昇進し、山形縣下左澤町及長井町、朝鮮平和北道、奈良縣下松山及下市に於て勤務、大正十四年三月退職した。

退職後、即ち同年八月から現住の場所に旅館玉川館兼下宿業を開業し、以て今日に到れり。

氏は日清日露役に從軍し、勳七等に叙せらる。

原籍地　山形市香澄町

理髪業　**町田克三**

現住所　東京市京橋區南鍋町五

氏は明治廿八年五月生れ、基氏の三男。
郵里で小學校卒業後、仙臺に出で、東北學院に入り、首尾よく之を卒業した。
其後仙臺の河瀬理髪店に於て理髪業を修業し、明治四十一年上京、横濱の芝山銀座支店主任として經營宜しきを得、業務大に發展した。
大正九年前記の場所に獨立して開業し、日増しに盛大に赴きつゝある。
氏は上京後理髪業の組合幹部となつたこと數度、常に組合の改善、斯業の發展に努力したことは隱れもない事實である。

原籍地　山形市旅籠町五七六ノ二

山形自由新聞社東京支局長　**渡部彦四郎**

現住所　東京府豊多摩郡戸塚町下戸塚三〇七

電話牛込六九番

氏は明治廿一年九月廿三日の出生。
明治卅六年十月山形日報社に入社し、同卅七年四月東京早稲田實業學校に入學したが同卅八年九月病氣の爲め退學し、再び山形日報社に入り、營業部長心得より、大正元年營業部長に昇進し、大正三年一月同社を辭した。
同三年二月上京して東京中央新聞社に入り營業部に勤務し、同十年八月迄前後八年間勤續した。
大正十年同社を辭し、同年八月二十五日新に山形自由新聞社に入り、東京支局長に就任以て今日に到る。
新聞支局長として新聞事業に趣味を有するのは云ふまでもないことであるが、其他酒、旅行等も趣味の一つである。

原籍地　鮑海郡松嶺町

會社員　小林憲吉

現住所　東京府荏原郡馬込村一〇六三

氏は明治廿六年八月廿日生。

明治四十四年三月米澤工業學校染織科を卒業す。

同年十二月福島縣輸出羽二重檢査所技手拜命。

大正元年十月卅日京都市七條千本南第一工業製藥株式會社に轉じ、石鹼工場を擔當し、同五年より約二ヶ年間東京支店創立の爲め單身上京、同七年一月東京支店（日本橋區橘町一、電話浪花三五三番）を創立し、其主任となり、奮鬪努力、以て今日の盛況を見るに到る。

營業品目は工業用マルセール石鹼、染織用糊劑、加工澱粉、農藝用穀菌劑等である。

原籍地　鶴岡市十三軒町二

紙布、葛布

芭蕉布製造業　小池良榮

㊟八千代工場主任

現住所　東京府北豐島郡瀧野川町上中里五三四

氏は明治十三年八月一日生。

良知氏長男で、鶴岡の染織學校卒業後、鄕里に於て織物業に從事して居つたが、大正十三年現在の場所に於て紙布、葛布、芭蕉布等の製造販賣を營み、今日では開業日尚淺きにも拘はらず、既に多大の發展を見て居る。

氏は染色織物に就ては常に熱心に研究を續けられ、明治三十八年支那に赴き、備に實地を視察、研究し、歸來大に氏の營業に資する所があつた。

大正十一年平和博覽會に氏の研究に成る馬巢織を出品して褒狀を授與された。

二男一女あり。

原籍地　南村山郡金井村黑澤

著述家　渡邊七郎（號默禪）

現住所　東京府北豐島郡高田町下田六七

氏は明治三年六月、同村大地主渡邊久右衛門氏の分家久五郎氏の七男として生れた。氏の母は山形市十日町の儒者で醫業を兼ね且つ書畫詩文を以て聞えた細谷風翁の娘であつたから、氏は遺傳に依り幼時より詩文の才能を有し、專ら文藝に親しんだ。

明治廿五年山形日報社に入り、廿六年兩羽日報を創刊し、廿七年山形日報主筆となり大隈の條約改正事件を批判して發行停止を受くること三十回に及ぶ。

其後廿七年上京、やまと、東京毎日、都、毎日電報社、大阪毎日社、大正日日社等を經て、大正十一年大東京新報を創刊したが、不幸にして同年解散した。

新聞及雜誌の小說創作に從事すること二十餘年、前後五百餘篇の著作あり。其中都に出した出世作『堀のお梅』は通俗人情歷史物として今尙人口に膾炙さる。

氏は實に我が山形縣の生んだ唯一の特色ある大衆文藝大家の一人である。

原籍地　東村山郡山邊町

東京顯微鏡院長　遠山椿吉

現住所　東京市芝區白金三光町四五一　電話高輪五三三四番

正四位、醫學博士遠山椿吉氏は安政四年十月の生れ、明治十六年東京帝國大學別科醫學部卒業、同年後、廿一年迄山形市醫學校（當時乙種醫學校）に教鞭を採り自ら校長たり。廿二年より東京帝國大學にて黴菌學を專攻し、同年四月東京顯微鏡院を設立、氏はその長として專門の教授と同學的各種事業を行ひ、今日に至る迄卒業生を出す事二萬人。卅三年より東京市技師、衞生試驗所長として敏腕をふるひ、大正五年三月退職卅六年十月、學位請求論文『ペスト菌、其他菌類研究』にて醫學博士號授與。四十年より四十一年に至り、歐米各國に留學、大正九年三月都市計畫東京地方委員囑託となる。專門は衞生學、細菌學、脚氣病學、著書數種、重なるものは『黴菌學』『近世衞生學』『東京市改良水道の衞生學的觀察』等、趣味として挿花、和歌、園藝殊に挿花は號を九鱗、半龍等と號し、『挿花の趣味』の著あり、因に夫人康子との間に六子あり。

原籍地　東村山郡天童町

宗教家　**松本昌慶**

現住所　東京市芝區三田南寺町一〇

氏は明治七年一月三十日生れ。
明治廿八年淨土宗東京支校卒業。
大正七年現在の貞林寺に住職となり以て今日に至る。
他に各寺の住職を歷任。
氏は最も敬虔にして熱情に富める宗教家らしい宗教家である。

原籍地　最上郡新庄町沼田三五

會社員　**後藤廣面**（ヒロモ）

現住所　東京府荏原郡品川町南品川宿八〇　電話高輪三六一番

氏は明治卅年九月生れで、中野豐政氏の三男。
大正十三年慶應義塾大學政治科卒業。
同十四年五月後藤姓を嗣ぐ。
賣藥請賣業、保險業其他各方面に活動して居る。保險の方は合名會社三幸堂保險部の主任である。
氏は齡未だ而立に達したばかりの壯年であるが、頗る活動的の人物であるから其前途は蓋し刮目して見るべきものがある。

原籍地　米澤市アラ町

美術鑄金業　**安部榮藏**

現住所　東京府北豐島郡日暮里町日暮里四九七

氏は明治十一年十二月三日生。

號は胤齋。

新五郎氏四男、兄繁次郎氏より美術鑄金業を學んだ。繁次郎氏は光齋と稱し、斯業に就て傑出した手腕の持主であつたが、不幸三十一歳で病歿された。

明治廿五年上京、下谷區上野花園町で本業を營んだが、明治四十一年現住所に移轉工場を設立し、業務益發展して今日に到る。

氏の仕事として其主なるものは弘前公園にある津輕侯の銅像、鶴見の觀音像、松平直公の銅像等である。

氏に五男あり。長子十四歳。

原籍地　米澤市座頭町三四〇九

東京帝國大學教授　**伊東忠太**

現住所　東京市本郷區駒込西片町一〇と八　電話小石川一〇五〇番

我國建築界の權威、從三位勳二等工學博士、東京帝國大學工科大學教授伊東忠太氏は米澤藩士醫師伊東祐順氏次男、慶應三年十月生。

明治廿五年東京帝國大學工科大學建築學科卒業、同卅二年帝國大學助教授となり、同卅八年教授に昇進し、今日に到る。

明治卅四年工學博士の學位を受け、大正十四年帝國學士院會員となる。明治卅五年より三ヶ年間支那、印度、土耳古に留學、其前後支那に五回、佛領印度支那に一回派遣さる

氏は帝大教授の外、帝室博物館學藝委員、明治神宮造營局參與、古社寺保存會委員、營繕管財局顧問等の要職にあり。著書『法隆寺建築論』を始め何れも有名なり。建築上に於て明治神宮、朝鮮神宮を始め我國主要の建築凡て氏の設計監督に成る。

夫子千代子（明治十四年生）との間に二男一女あり。

原籍地　北村山郡楯岡町一二〇八

會社員　芦野太藏

現住所　東京市牛込區藥王寺町二〇
電話牛込五六二三番

氏は明治十九年二月十四日生。
明治卅九年縣立山形中學校卒業。
同四十四年明治大學商科卒業。
同年新潟水電株式會社に入社し、大正元年轉じて村井合名會社事業部に就職した。
目下は村井合名會社理事、村井鑛業株式會社監査役、村井貿易株式會社監査役等の重要な位置を占め前途に多大の未來を有する實業界の新進である。
氏は芦野民之助氏長男。
氏に四男三女あり。長子は十五歳で中學三年在學、長女は十六歳で女學校四年生である。

原籍地　山形市

京橋醫院主並海岸病院長
正七位、醫學士　安藤勝四郎

現住所　東京市京橋區疊町五
電話京橋（四一四番）（二七五番（病院專用））

氏は明治六年二月十八日生、宮城縣白石町鈴木源治氏の二男で後故ありて安藤姓を嗣いだ。
明治卅七年三月東京帝國大學醫科大學を卒業し、其後引續き青山内科に三ヶ年間助手として勤務した。
明治四十年現住所にて開業し今日に到る。外に新佃島に於て海岸病院を經營す。
氏は醫術開業試驗委員、東京府囑託恩給顧問醫（但し小學校教員體格試驗醫を兼ぬ）たり。功勞に依り正七位に叙し銀盃を下賜さる。
嘗て陸軍幇助員たりしに依り從軍記章及び一時賜金を授けらる。
三男四女あり。長男十六歳で中學在學中。

原籍地　山形市

著述業　渡邊陸郎

現住所　東京府豐多摩郡杉並町高圓寺二二五

氏は明治廿五年十二月九日生、早稲田大學文學科を卒へ、更に政治經濟學科を卒業するや、進んで研究科に入り、服部文四郎氏の下に研鑽を續け、傍ら明治大學高等研究科に籍を置いて法律學を修めた。後農工貯蓄銀行深川支店次席より日本勸業銀行に轉じ、本店預金割引課並に收支課の主任に歷任した。

偶宿痾の爲めに退職し尙一切の公職を辭して療養に怠りなき傍ら著述業に從事して居る。又曾て大倉林業社の創立に與り推されて社長となつたこともあり、學生時代より山形新報社の社友として終始同紙に寄稿して居た。

山形市の素封家先代渡邊吉兵衞氏の三男に生る。大正十一年分家して一家を創立した。現住宅は氏自らの設計に成り工事は早大教授坂本三郎氏監督の下に施工された。

尙氏は歌澤ぶしに趣味を有し『はうた集』の著書もある。

原籍地　山形市香澄町木實小路三七ノ三

會社員　會田邦太郎

現住所　東京府北豐島郡日暮里町元金杉町一〇〇二

氏は明治卅一年四月廿日生。

榮之助氏長男。

大正二年仙臺電信通信生養成所卒業。

卒業後山形郵便局電信係に勤務、後大正十年遞信省通信局電信課に轉じた。

傍ら專修大學に入り、大正十三年同大學經濟專門部を卒業した。

其後日本國產株式會社に入社し、以て今日に到る。

夫人梅子(二二)

原籍地　飽海郡酒田町今町三七

銅鋼鐵問屋　現住所　東京市日本橋區本材木町二ノ一一　電話大手長四〇一〇番

佐藤長吉

氏は明治十三年五月十七日出生、平三郎氏の長男、嘗て正則英語學校、慶應義塾商業部を卒業し、明治卅八年上京、同年十月より同四十四年迄鐵道院に奉職した。

其後盛興商會に入り、設立當初から輸出方面に活動し、大に成績を擧げたのであつたが、大正九年四月現住所に合資會社佐藤商店を創立し、氏は其代表者となり、材料部、機械部、製作部、木材部、石炭部等の各部を置き盛に活躍して居る。

同店製作部の事業として之迄見るべきは實踐女學校鐵筋組立てと、現在從事中の日本製粉會社小名木川工場鐵筋組立工事等である。

氏に一男三女あり。趣味は刀劍書畫類

支店＝府下尾久町下尾久九二九

自宅＝下谷區谷中坂町九五

原籍地　東村山郡山邊町三一八

印肉文房具製造販賣業（インキ）　現住所　東京市下谷區二長町三四　電話淺草七〇八九番（呼出）

柏木千一

氏は明治廿八年四月廿五日生。

柏木喜代太氏の四男、喜代太氏は現在縣會議員にして製絲業其他の實業に從事され、地方の有力者である。

鄕里小學校卒業後、兵役として海軍に入り一等水兵として除隊、其後鄕里に於て商業に從事したるも、考ふる所ありて大正九年上京した。

上京してから或は簿記學校に於て簿記を專修し、或は商業の實地見習ひをなし、大正十三年十一月現在の場所に於て開業以て今日に到り、營業は日に增し發展して居る。

氏の兄繁太郎氏は音樂家で、嘗て米國に學び、山形縣立工業學校囑託教授たり。

一男あり

原籍地　鶴岡市一日市町一四

洋服裁縫店　**佐藤德太郎**

現住所　東京市淺草區千束町一ノ六九

氏は明治十五年十月卅日生。

八重藏氏の長男。

郷里に於て洋服裁縫業を營んで居つたが斷然考ふる所ありて大正三年九月上京、淺草區龍泉寺町に洋服裁縫店を開業し、營業大に繁榮を極めたが、震災の後現在の場所に移轉し、相變らず、營業の繁昌を來しつゝあり。

氏は餘技として將棋に非常に巧妙で、棋狂倶樂部主として、圍碁、將棋の集合所を開き、氏自ら實地教授されて居る。

一子あり。廿三歳で父君の業を助け營業に從事して居る。

原籍地　東置賜郡糠野目村

公吏　**竹田通徹**

現住所　東京市芝區三田小山町一

氏は明治廿一年十二月廿日生、當時少壯政治家として名聲あつた川合通次氏は實に氏の嚴父であつたが、惜いかな、氏が幼少の際に他界された。

嚴父死去後の氏は堅く心を決する所ありて上京し、苦學で順天中學を卒業したが、其以上の學問は到底家計の許す所でなかつた。其際同郷の先輩で東京市衞生試驗所長であつた醫學博士遠山椿吉氏の知る所となり、同氏の斡旋で市役所衞生課に職を奉じ爾來十數年同博士の薫陶を受け、現在では東京市衞生課消毒所赤羽支部長の重任に就き市衞生の爲に多大の貢献をなしつゝある。

氏に一男一女あり。男幸雄氏は山形高等學校在學の秀才。

趣味は寶生流の謠曲、激務の間尚這箇の餘裕あり。

原籍地　東田川郡山添村下山添

從六位　勳六等
鐵道省監督局事務官
財團法人庄內館監督

佐藤雄能

現住所　東京府北豐島郡瀧野川町中里三〇六

氏は慶應元年五月三日生、庄內藩士辻新右衞門氏の四男、同藩士佐藤家を繼ぎ、佐藤姓に改む。朝陽小學校に學び、後山形師範學校を卒業す。更に早稻田大學の前身東京專門學校に入り明治廿三年行政科を卒業し、卒業後一時文筆の人となり、更に日本郵船會社に入りしも幾くもなくして退職、明治廿八年熊谷直太、高山樗牛外數氏と後進指導の目的を以て庄內館設立の議あり、翌廿九年愈設立の運となり、氏は擧げられて出京、監督の任に就く。爾來庄內館の擴張に努力せられ、設計圖を改むること七回遂に完全無比の庄內館の實現を見るに到つた。其後大震災で全燒したが、更に間もなく復興した。氏が其繁忙の寸暇を割いて著述せるもの株式會社會計、鐵道會計、應用鐵道會計、株式會社の四著述あり。

氏に三男一女あり。長男正能氏は法學士にして文部省勤務。庄內館內に氏の胸像あり、以て氏が鄕黨に欽仰せられ、德望に富めるかを知るに足る。

原籍地　最上郡新庄町金澤

自動車修繕業

齋藤義四郎

現住所　東京市麻布區新廣尾町一ノ一一二

氏は明治廿四年四月十八日生。

山形縣立新庄中學校第三學年履修の後上京、工手學校機械科に入學して、首尾よく同校を卒業した。

同校を卒業した後、赤羽飛行機工場、東京石川島造船所自動車工場等に勤務したが震災後獨立して前記の場所に自動車修繕業を開業することゝなつた。

氏の工場名は齋藤自動車工場と稱し營業課目は各種自動車發動機修繕、附屬品製作等である。

營業日尙淺きに拘はらず、業務の益發展せんとするを見るは、氏の努力奮鬪と、其誠實勉强とに負ふ所少くない。

原籍地　山形市香澄町

高等工業學校教授　**中原虎男**

現住所　東京府豐多摩郡戸塚町宮田三一七

氏は明治卅年一月十七日生。
大正四年山形縣立山形中學校卒業。
同九年東京高等工業學校紡織科卒業。
同年高等工業學校教授に任命、以て今日に到る。
氏は專門學の外、文藝方面の造詣頗る淺からず、從つて文壇知名の人々との交遊多し。目下聚芳閣にて文藝物著作の單行本出版中。
俳句に於ても優に一家をなす。

原籍地　米澤市大町九九四

㊟酒類問屋　**齊藤鐵次郎**

現住所　東京市淺草區山谷町六四

氏は明治廿六年十月六日生。
伊右衞門氏三男。
大正元年山形縣立米澤中學校卒業。
卒業後は家事の手傳ひをして居つたが、大正八年上京下谷區龍泉寺町三一五で酒類問屋を開業した。
然るに大正十二年の大震災で氏の商店も全燒したので、同十三年現在の場所に移轉し、酒類の卸賣殊に米澤銘酒の販路擴張に全力を注ぎ、營業日に增し發展しつゝあり。
氏は一子あり。

原籍地　山形市旅籠町四五五

村上誠太郎

現住所　東京市牛込區細工町七

氏は文久二年三月五日生れ。
明治十四年二月米澤區裁判所十七等出仕拜命以來、山形地方區裁判所監督書記を勤務し、明治廿七年辭職した。
其後山形自由新聞社主幹となり、明治卅七年山形日報社に轉じ、同卅八年同社を辭して上京した。
上京後三省堂印刷部國定教科書主任となり、明治四十年秀文社印刷所主任に轉じ、大正四年十月辭任した。
同五年四月には穗積男爵家執事會計の職を奉じ、約十年間忠實に勤務したが、同男の薨去と共に大正十五年七月同家を退職し今日に到る。
趣味としては盆栽、書畫。

原籍地　西村山郡本郷村本郷一四二

獸醫

最上仲衛

現住所　東京府豐多摩郡戸塚町下戸塚四七六

氏は明治廿年生。
明治四十二年宮城農學校獸醫科を卒業した。同四十三年四月から山形縣警察部の衛生課に奉職し、大正七年四月まで前後九年間の長日月を勤續した。
大正七年四月上京し警視廳衛生部に奉職したが、同十五年三月退職。
其れから現住所に於て引續き獸醫を開業して居る。
夫人壽惠野子(三七)は山形高女出身

原籍地　山形市長源寺町二〇九

酒食料品
卸小賣業　千歳屋　森谷安治郎

現住所　東京市牛込區馬場下町二〇　電話牛込九二六番

氏は明治十五年三月十三日生。

明治卅七年、日露戰役の當時志を立てゝ上京、種々の事業に從事したが、努力奮鬪遂に大正六年に到つて現在の場所に酒食料品卸小賣業を開店し、其後漸次營業が發展し、現今では同方面で押しも押されもせる第一流の酒店となつて居る。

氏は全く努力奮鬪、殆んど無資本より今日迄仕上げたのであつて、從つて成功した今日でも更に精勵倦む所がない。今後の發展更に大に見るべきものがあろう。

氏の店舗は早稲田穴八幡の筋向ひにあつて同方面目拔きの場所である。酒店の外千歳運送店として運送業をも兼ぬ。

氏は斗酒猶辭せざるの酒豪である。俗謠は最も其の得意とする所。

令息は早大政治科出身。

原籍地　米澤市下花澤久保町

從七位勳七等
戸山學校
軍樂隊樂長補　大沼哲

現住所　東京市牛込區大久保余丁町九一

氏は明治廿二年六月十七日生で、要太郎氏の長男。

鄕里の花澤小學校(現今の東部小學校)を出で、米澤縣立工業學校に入り、明治四十年十八歳にして戸山學校軍樂隊生徒として入學、四十一年卒業して樂手補となつた。

其後累進して大正十四年五月には樂長補に補せられ、同年九月學校から佛蘭西、伊太利兩國に派遣された。

佛國では巴里にある佛蘭西最高音樂學校スコラカントルムに入り、作曲科と樂長科(指揮)を修業した。其れから伊太利を視察し、米國に一ヶ月許滯在して過般歸朝したのである。

夫人カウ子(二七)との間に一男あり。

原籍地　山形市七日町

酒食料品卸小賣
山形屋商店主　**菅野勇藏**

現住所　東京市淺草區千束町一ノ七五

氏は明治十三年九月一日生れ。

氏の祖先は水戸藩士であつたが其後山形に歸農し、喜惣兵衛と稱した。七代前に濁酒の釀造をなし、五代前から酒の釀造を試みて成功し、銘酒『末廣』を賣出して世間の賞贊を博した。然るに先代兵藏氏が生絲業に失敗したので遠の名家も一時破産の運命に遭遇した、此時氏は年齒僅に十七歳の弱年であつたが直に父祖の業を繼いで、酒類仲買を經營中、明治四十四年山形の大火で再び全財産を灰燼に歸せしむるに到つた。

玆に於て氏は奮然志を決し家族十餘人を率ゐて上京、僅か二十五圓の資本で酒食料品小賣業を開始し、惡戰苦鬪遂に今日の地歩を築き上げた。其行程は誠に一片の立志傳であるが、今日では同方面でも最も信用實力ある店舗となつて居る。

氏の今日に到る夫人リウ子内助の効少からず、五男五女あり。

原籍地　南村山郡上ノ山町

官吏　**大泉幸作**

現住所　東京府荏原郡世田ヶ谷町下北澤九一五

氏は明治廿九年九月生。

大正七年工手學校土木科修了。

卒業後農林省水産局に勤務し、以て今日に到る。

夫人忠子との間に子女一人あり。

原籍地　南村山郡東澤村妙見寺一六一九

會社重役　現住所　東京府豐多摩郡代々幡町代々木富ヶ谷一四六二

鈴木鈴馬（スヾ）

氏は明治三年七月七日山形市外東澤村妙見寺に生れ、明治廿三年縣立山形中學校卒業、間もなく內務省藥劑師試驗に及第し藥劑師免狀を受領した。

更に上京して東京高等工業學校に入り、明治廿六年同校機械科を卒業し、同廿七年同校研究科修了、直に帝國製麻會社の前身北海道製麻會社に入つた。明治卅八、九年麻業見學として歐米に赴き、大正七年同社取締役に擧げられ、同八年十一月十三日實業功勞者として須磨離宮に召され優握な御綻を拜した。

現在は帝國製麻株式會社常務取締役、奉天、臺灣各製麻株式會社取締役を兼ね、村山同鄕會理事として大に鄕縣の爲めに盡して居る。

家族は母ッネ子(七七)東澤村本宅居住、妻ナカ子(五六)男重屹(三〇)桐生高工卒業帝國製麻大阪工場勤務、同夫人ミヨ子(二二)孫敏且(五)廉子(四)等である。

原籍地　東田川郡手向村二二七

從五位勳三等　海軍大佐

大澤玄養

現住所　東京市本鄕區駒込富士前町六一

氏は明治十四年八月四日生。

醫大澤玄齋氏二男。

明治卅四年十二月海軍兵學校生徒となり、日露戰役に從つて大に殊勳を擧ぐ。

同四十四年五月海軍大學乙種學生となり、同十二月海軍水雷學校高等科學生となる。

世界大戰に於て日獨戰役に從事し、殊功を持て、大正四年六月海軍大學選科學生となる。

大正八年五月東京帝國大學理學部聽講生となる。

同九年一月以降海軍技術研究所勤務、以て今日に到る。其他海軍水雷學校教官、海軍艦政本部技術會議々員を兼ね、傍ら無線電信電話に關する研究に從事す。

原籍地　北村山郡横山村番外地

東京整流機製作所主　**織江祐信**

現住所　東京市麻布區簞笥町六二

氏は明治廿七年二月一日出生で、織江諦道氏三男、同祐道師實弟である。

大正六年上京、東洋大學に入學したが、家事の都合で中途退學し、それから日本自動車學校に入り、卒業後牧山清砂氏方で自動車運轉手を勤務して居る。

氏は電氣學に趣味を有し、獨學で電氣學の智識を得てから、可逆整流裝置に就て考案發明する所あり、大正十四年一月廿八日付で特許第六四九一四號で專賣特許權を得た。現在市外中目黒九一〇番地で東京整流機製作所を設立し、整流機の製造販賣に從事して居る。

氏の家は代々鄉里淨榮寺の住職で、兄の祐道師は現住職である。

氏に一男一女あり。

原籍地　北村山郡東根町六田一一四

フエルト草履並履物表整理型製造業　**菅野富之助**

現住所　東京市淺草區金龍山瓦町四

氏は明治十七年一月十六日生。

富吉氏の三男で、鄉里で小學校の課程を終へ、煙草製造業に從事して居つたが、煙草の官營となると同時に廢業の止むなきに到り、其後徵兵適齡で入營し、除隊後一時煙草專賣局に勤務した。

大正四年意を決して上京、フエルト草履並に履物表整理型製造業を開始したが、此の整理型は草履表製造業者が粗製品を整理するに少からぬ便宜があるから、其需要は日に增し增加し從つて其事業も昇天の勢を以て逐日發展しつゝあり。

氏は陸軍歩兵一等卒で、日露戰爭に從軍し、勳八等に叙さる。

原籍地　北村山郡楯岡町一二六七

待合業　つる長　遠藤テル

現住所　東京市淺草區旅籠町一ノ五
電話淺草三二〇一番

明治六年二月三日生、清五郎氏の長女で、同四十四年七月東根で更科（さらしな）と云ふ料理店を開業し、女主人公の如才ない取持で一方ならぬ繁昌を見せた。

越えて大正八年東根を切上げ、東京は京橋の三十間堀で國産「なめ子」料理店を開業し、大に山形縣の爲めに氣を吐いたが、同九年九月更に柳橋代地に轉じ、つる長と云ふ待合を出した。

此待合も大分繁昌したが、不幸にも十二年の大震災で全滅したので、今度は河岸を淺草に代へ、相變らず待合業を繼續して居る。

六年生れと云へば既に五十四歳であるが、元氣は益旺盛で、客の待遇にそつのあらう筈がないから營業の日增し繁昌して來るのは云ふまでもない。

原籍地　北村山郡金井村江俣

三力商會主　長岡幣三

現住所　東京府北豐島郡長崎村大和田二〇二四

氏は明治十七年生、明治卅四年山形縣立山形中學校卒業、東洋大學の前身たる哲學館に入學、哲學科を履修したる後、早稲田大學商科に入り明治四十年第一期卒業生として同校を卒業した。

卒業後東京銀行集會所に十一年間勤務し、偏に實業界の實地見學をなし、其後東洋塗織工業株式會社取締役、日章信託株式會社支配人となる。

大正十四年より合資會社三力商會を組織し、木材、山林の經營に從事す。

氏は一面政界に意あり、一たび鄕里より代議士候補たらんとして果さゞりしは遺憾と云ふべし。教界方面に於ては多年雲照律師を師とし、眞言宗傳法院流の傳授を受けたるを見ても其造詣淺からざるを知るに足る。

氏の前途は政界、教界、實業界三方面何れも刮目して見るべきものあるべし。

五女あり。

原籍地　東村山郡天童町

教育家　谷なほ子

現住所　東京市深川區常盤町一ノ九

氏は明治十九年十一月六日生。

明治卅八年山形縣立山形高等女學校卒業、直に準教員の免狀を得、暫らく鄉里の小學校に教鞭を執つて居つたが、其の在任中小學校入學前の幼時卽ち四歲から五歲までの間の兒童の教育が如何に重大なるかを深く感ずる所あり、斷然該小學校を辭し、單身上京數月ならずして幼稚園保姆の資格を得られ、直に現在の明治幼稚園に入つた。

其後種々幼兒の教育方針に就て日夜研究、工夫を重ね、氏の肉身の母だにも及ばざる溫情愛は、世話された幼兒は勿論、其父兄も等しく氏に畏敬、親愛の念を捧げて居るのである。

氏は在來の園兒の遊戲の型を破り、優雅にして健康上頗る好果ある數多の遊戲方法を考案され、氏の名聲は東京市幼稚園協會にても常に明星の如く輝いて居る。

原籍地　米澤市

諸會社重役　吉池慶正

現住所　東京市牛込區市谷柳町三五　電話牛込三三三〇番

米澤藩士吉池在右橘氏の嫡男にして明治二年九月八日を以て生る、早く鄉里の中學校を終へて東上、農商務省西ヶ原試驗所に入り、專心學理と實地とに就て研鑽を重ね明治廿五年大日本蠶糸會創立を主唱し、廿七年職を新潟縣に奉じ、大に蠶糸の振興に從事し、卅年埼玉縣競進社蠶糸學校教授となり、翌年農商務省に入り、專ら蠶業に關する事務に從事し、蠶病豫防法の起草をなし、蠶糸業者に多大の稗益を與ふ。

四十一年大日本蠶糸會理事に擧げられ、同年同會の事業に全力を捧げ、萬國博覽會視察の用命を帶びて伊太利に渡り、歐洲各國の蠶糸業狀態に就いて精査研究する處あり、歸朝後斯界の爲に盡力、現に大日本蠶糸會理事、帝國養蠶組合委員長、東亞振興會理事、蠶業組合中央會相談役、歐亞蠶糸、日出セメント各株式會社取締役たり。

因に家族は夫人この子、養子四郎、女千代子(四郎氏夫人)等にして長女八重子は山形縣士族櫻井五郎氏に嫁せり。

原籍地　飽海郡酒田町上袋小路七

齒科醫　**高坂與太郎**

現住所　東京市日本橋區小傳馬町三ノ二二
電話浪花七九一〇番

氏は明治十九年三月十日生。

與作氏長男、酒田高等小學から、郡馬縣邑樂中學に入り、三年中途退學、校長宅にて中等教育を修了し、上京して國民英學會に入り、更に東京齒科醫專に入學し、最高コース卒業（稱號バチエラー、オブ、デンタル、サーチエリー）大正五年二月現在の場所に開業して今日に到れるが、氏の如才なき交際振りと、熟練した技術と相俟つて業務益繁榮、常に多數の固定的得意を有す。

尙氏は東京市齒科醫師會日本橋區支部長、東京都市計畫土地區劃整理委員補缺委員、東京市勤儉奬勵委員、日本橋區小傳馬町三丁目幹事衞生部長等の要職にあり。以て氏の社會的信用の一班を知るべし。

趣味極めて多方面、殊に日本音樂（歌澤、長唄）に嗜好を有す。

原籍地　米澤市

東京帝國大學
文科大學教授　**吉田熊次**

現住所　東京市小石川區白山御殿町一一〇
電話小石川六六〇番

氏は吉田榮次郎氏の長男、明治七年二月廿七日の誕生であり大正七年家督を相續す。

明治卅三年東京帝大文科哲學科を出で、更に大學院に學び倫理哲學を研究し、明治卅六年倫理哲學研究の爲佛、獨兩國に遊び、卅七年歸朝、三月女子高等師範學校、東京高等師範學校教授を拜命し、卅八年七月白耳義國モンス市に於て開催せる世界經濟擴張に關する萬國會議に參列仰付らる。

明治四十年十月東京帝國大學助教授となり、四十一年十月東京高等師範學校教授を兼ぬ。四十五年十一月文學博士の學位を授けられ、大正二年九月休職となり私費を以て再び歐洲に留學す。同年東京帝國大學文科大學教授兼東京女子高等師範學校教授となる。

家族は夫人ユキ子（明治十五年生文博井上哲次郎氏女）及び養子昇（大正五年生）なり